

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成

— 女性の役割を見据えた知の国際連携 —

大学間連携イベント 「国際協力ボランティアを知ろう」実施報告書



2016 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国等における平和構築と開発に関する調査、教育、実践を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業を平成 22（2010）年度から実施しております。本冊子は、この事業の一環として 2016 年 2 月 12 日－13 日に実施した大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」の実施記録と参加学生による報告を取りまとめたものです。

お茶の水女子大学、奈良女子大学、宮城学院女子大学の 3 校から参加した学生は独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所において、アジア・アフリカの途上国へ派遣予定の訓練生の方々との交流や、2 年間の任期を終えて帰国された元ボランティアの方々の体験を直接伺う機会を持ちました。70 日間におよぶ訓練の一部を聴講・体験し、訓練生の方々と直接言葉を交わすことによって、国際協力やボランティアについての理解を深め身近に感じる貴重な機会をもつことができました。

福島県浪江町で障がい者の方々の就労と自立支援のために設立され、2011 年 3 月の東日本大震災と原発事故のため二本松市に避難・移転して事業を継続している NPO 法人コーヒータムでは、職員と利用者の方々が数々の困難を乗り越えて笑顔を絶やさず活動していらっしゃることに深く感銘を受けました。

今回のイベントの実施にご協力、ご支援をいただいた JICA 二本松の洲崎所長はじめスタッフ、訓練生の皆さま、NPO 法人コーヒータム橋本理事長はじめ職員・利用者の皆さまに心よりお礼申し上げます。

2016 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター
センター長 北林 春美

目次

1. 活動の概要	1
(1) 活動目的	
(2) 実施期間・場所	
(3) 内容・プログラム	
(4) スケジュール	
(5) 参加者	
2. 参加者報告書	7
3. 参加者活動記録	43
4. イベント終了後参加学生アンケート集計結果・写真・資料	57

1．活動の概要

1. 活動の概要

(1) 活動の目的

途上国に住み、社会の中で現地の人々とともに働く国際協力ボランティアの役割や、ボランティアになるために必要とされる資質、ボランティアの活動から得られることやボランティアが日本社会に還元できることについて理解を深めること、同じ関心を持つ他大学の学生と意見交換を通じてネットワークを形成することを目的に実施した。

(2) 実施期間・場所

2016年2月12日（金）～13日（土）

福島県二本松市

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所

NPO 法人コーヒータイム

(3) 内容・プログラム

選考試験に合格して東南アジア、アフリカ諸国に派遣予定の青年海外協力隊候補者が派遣前訓練中の独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松訓練所を訪問し、1日5時間の語学集中研修を中心とする70日間にわたる派遣前の訓練プログラム、規律や自主性を重んじる集団生活などを直接観察・体験した。

訓練所長による講義、キルギス共和国から昨年帰国した元ボランティアの体験談の他、3グループに分かれて協力活動手法（コミュニティ開発、感染症・エイズ対策、環境教育）の講義を聴講した。派遣前訓練中の協力隊訓練生との意見交換・交流を行い、2日目に各グループが聴講した協力活動手法や訓練生とのディスカッションの結果を発表した。

13日には、障がい者の自立に寄与することを目的として福島県浪江町で小規模作業所として平成18年に誕生し、現在は就労支援B型事業所※として作業・生活訓練を通して社会復帰・社会参加を促進する事業を行っているNPO法人コーヒータイム（東日本大震災後の原子力発電所事故により浪江町全体が避難指示区域となったため、2011年10月二本松市に拠点を移して活動を継続している）の作業所と喫茶店を見学し、橋本理事長（ご本人も単身赴任中）から、団体の活動の概要、東日本大震災と原発事故に伴うスタッフ・利用者の避難の経過などについてお話を伺い、利用者の皆さんの作業所や喫茶店での活動を見学した。

※ 障害者総合支援法(旧 障害者自立支援法)に基づく就労継続支援のための施設。一般企業等への就職が困難であり雇用契約に基づく就労が困難である方に対して就労機会の提供、生産活動機会の提供、その他の就労に必要な知識および能力の向上のために必要な訓練およびその他の必要な支援を行う

(出所：厚生労働省ホームページ)

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/service/shurou.html>

(4) スケジュール

2月12日	07:30	お茶の水女子大学 発 (バス)
	12:00	二本松青年海外協力隊訓練所着
	12:30	昼食 (JICA 二本松訓練所食堂)
	13:30	二本松青年海外協力隊訓練所見学
	14:00	講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」 講師：洲崎毅浩所長、永井涼所員、中沢舞所員
	15:10	講座「協力活動手法」聴講 「コミュニティ開発」 講師：結城史隆技術顧問 「感染症・エイズ対策」 講師：神谷茂技術顧問 「環境教育」 講師：三好直子技術顧問
	17:15	講座「協力隊体験紹介」 講師：中沢舞所員 (キルギス国コミュニティ開発)
	18:00	夕食・派遣前の訓練生との交流 (JICA 二本松訓練所食堂)
	19:10	訓練生とのディスカッション
	23:00	消灯
2月13日	6:30	訓練体験参加「朝の集い」
	7:10	朝食 (JICA 二本松訓練所食堂)
	8:00	片づけ、荷物整理、退室 (チェックアウト)
	9:00	グループ・ミーティング：振り返りと学習成果発表
	10:05	二本松青年海外協力隊訓練所出発
	10:30	二本松市民交流センター着 NPO 法人コーヒータイム 橋本由利子理事長講演 金色作業所・喫茶店の見学
	12:00	昼食 (二本松市民交流センター会議室)
	13:15	二本松市民交流センター出発
	16:30	お茶の水女子大学 着

(5) 参加者

お茶の水女子大学学生 9 人 (うち留学生 1 人)
 奈良女子大学学生 2 人 (うち留学生 1 人)
 宮城学院女子大学生 1 人
 引率 2 人 (北林准教授、青木特任講師)
 合計 14 人 (引率含む)
 内訳

	お茶の水女子大学				奈良女子大学				宮城学院女子 大学
学部 学年	文教	理学	生活	院	文学	生活 環境	理学	院	学芸
1	5	-	1		-	-	-		-
2	2	-	-		-	-	-		-
3	-	-	-		-	-	1		1
4	-	-	-		-	-	-		-
留学生	-	-	-	1	-	-	-	1	-
小計	7	0	1	1	0	0	1	1	1
合計	9				2				1

2. 参加者報告書

岩井真恵美（宮城学院女子大学学芸学部 3 年）
植田 佳野（お茶の水女子大学文教育学部 2 年）
佐藤 知香（お茶の水女子大学生生活科学部 1 年）
高嶋 早紀（お茶の水女子大学文教育学部 2 年）
花岡 瑞月（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
プリマサリ・ニルワナ・デウィ（奈良女子大学生生活環境学部研究生）
政木 優子（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
増田奈津実（奈良女子大学理学部 3 年）
三浦 詩歩（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
三村 友里（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
宮川 優希（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
李 孝テイ（お茶の水女子大学大学院M1）

岩井 真恵美

宮城学院女子大学学芸学部食品栄養学科 3 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この二日間を通して印象に残った言葉がたくさんあります。まず洲崎所長のお話から、“「世界の中の日本」として考える国際協力が必要、「一国平和主義」からの脱却。”この言葉は、なぜ国際協力を行うのかという問いに対する一つの答えだと思います。「自国が平和であれば良い」「自分が幸せであれば良い」この考え方は孤立を招くでしょう。他者との関わり、多様な価値・文化に触れていく中で、日本が抱える問題についての解決策、これからの日本の在り方を見出していけると考えます。また“「行動力」が重要”という言葉から、患者を救えるのは医療従事者だけではなく、注射器などの資機材調達や病気の人を見つけることも救うという点では大きく関与していること、自分にできることを精一杯行うことで、誰かを救うことができるということに改めて気づきました。私自身、被災地である東松島でボランティア活動をしているのですが、自分にはいったい何ができるだろうと悩んだ時期がありました。そんな中でも、幾度もその地に通い、地元の方と触れ合う中で、大切なのはその時間かもしれないと感じ始めました。考え続け、そこで足踏みしていたって何も分からないし、変わらないのです。そこで行動することで、見えてくるモノがたくさんあります。地元の方のところへ行き、一緒にお茶を飲み、話をする中で相手のことを知り、何を求めているのか、そのニーズは何なのかを理解できることもあります。自分には何もできないと悲観的になるのではなく、何かするために、まず行動することが最終的に誰かを救うということにつながるのだと思います。“完璧にできなくて良い。完璧にやろうと思うからダメ、動いて失敗して経験を得て、成長する。”洲崎所長のこの言葉には、とても勇気をもらいました。行動する前から諦めるのではなく、行動していく中で人は成長していくことができるのだということ。背中を押された気がしました。次に JICA 職員の永井さんの“肥満・生活習慣病に悩む人が多い、食べられることがステータス”という言葉に驚きました。途上国は食に飢えている人ばかりだと思っていたからです。しかし考えてみると、贅沢のあまりない生活の中で「食」というのは一つの豊かさの象徴なのかもしれません。食事の摂り方・調理方法もその地に根付いた方法を重んじていたり、偏った食生活が想像できます。日本では、栄養指導時に一汁三菜のバランスの良い食事を勧めますが、実際は野菜が高い、そんなに食材をそろえることはできないという声を耳にします。そのため、おにぎり・菓子パン等といった炭水化物に偏った食事を続けてしまうのです。そういった中で、おかずを作りだめして、冷凍保存を提案することもあります。途上国には冷凍庫・電子レンジがないところがほとんどだと思います。途上国で通用するやり方を現地で見出していくことの必要性を感じました。

環境教育の協力活動手法の講座では、“参加者の温度を上げることが大切”“現地調達が

基本、創意工夫を行う”という言葉が印象的でした。椅子を円状に並べたり、講座の最初にはアイスブレイクをして場を和やかなものにすること、互いが話しやすい、学びやすい空気感をつくることが重要であることを学びました。材料は現地調達し、自分たちで創意工夫することで新たなアイデアを提案することができる。地元の人に興味を持ってもらうために必要不可欠なことだと思いました。

キルギスにコミュニティ開発としていかれた中沢さんの話の中で、“村の女性たちに仕事がない。情報交換不足。作っているものが、海外のニーズに合わない。”というのが印象的でした。これは外部から来たからこそその客観的な意見だと思います。「絨毯よりも小物製品の方がお土産として売れる」ことに着目し、プロデュースすることで、羊毛を使った商品、フェルト製品で無印良品とコラボすることに至ったこと。日本人だからこそできること、分かることを最大限に活かしていくことで、グローバル化の進展、「地域づくり」までつなげていくことができるのだと学びました。

2. NPO 法人コーヒータ임訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと

コーヒータ임の皆さんが、明るい表情でいきいきと働いている姿がとても印象的でした。障がいのために働くことが難しいと感じる方にも働きやすい環境をつくり、そこで自分らしい働き方をしてもらうという場の必要性を強く感じました。障がいを理由に諦めることは一つもなく、それぞれの能力や可能性を活かす場はあるべきです。理事長の橋本さんがおっしゃっていた“偏見はあるが、優しい方・知的な方ということ伝えたい。後押し、支援をしていきたい。”という言葉に、本当に必要な関わり方のヒントがあったように思います。今、自分のできる支援は商品を買うこと、周囲の人に伝えていくことくらいかもしれませんが、今後も自分のできる範囲で支援を続けていきたいです。

3. 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

今回のイベントを通じて、いつかは国際協力ボランティアに携わりたいという思いから、近い将来、国際協力ボランティア(JICA)に挑戦したいという思いに変化しました。一度きりの人生で、興味を持ったことには躊躇せず、挑戦することが可能性を広げる第一歩だと感じたからです。ボランティアは誰かのためだけでなく、自分のためでもあると思います。自己成長の場として多くを学び、それを還元していけるようになりたいです。現在、東松島で行っているボランティア活動も、すべてが自分の糧になっています。今後も様々な知識・能力を培い、発展させていき、常に「行動者」であり続けたいと思います。そして自分の行動の先に、誰かの幸せや喜びがあることを願って生きていきたいです。

植田 佳野

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所で過ごしたこの 2 日間を通して、「国際協力」に対する私の考え方が大きく変わったように思う。自分にとって最も大きな発見だったのは、国際協力は「個々人の特性を生かすことでできる支援が多様にある」ということに気づけたことだ。初日に訓練所に到着してすぐに所長の洲崎さんに講義をしていただいたが、まさにその考え方を初めて知った瞬間だったのでとても印象に残っている。例えば、一口に「保健衛生状況の改善」のための支援といっても、必要なのは病院の建設や看護師の訓練だけではない。病気の人を見つける、病院に連れて行く、薬代を寄付するなど、患者が病気を治すまでの過程の中には、特に医療関係の資格や専門知識がなくても行うことができる支援があるという。私は国際協力の中にも教育開発、保健・衛生、貧困、経済などさまざまな分野があるということをこれまでは漠然と認識していただけだったが、それぞれの分野に特化した知識を持っていなくても、自分にできることを活かして支援者として関われる部分があることを知った。そのことを踏まえた上で「感染症・エイズ対策」の講義を聴講したが、そこで支援の実例について学び、また訓練生の方々と実際にお話させていただいたことで、「一人一人が自分の特性を活かして活動する」ということの意味がより理解できたように思う。例えばマラリアの流行地域においては、医師や看護師などの医療のプロが関わることで医療機関の仕組みや設備を発展させていくことはもちろん重要である。しかしその他の支援として、蚊から身を守る「蚊帳」の認知度を上げる、販売プロモーションをするなどの啓発活動を行うことも求められている。それらの活動には、広告や営業に関する知識や経験がある人が携わることが望ましいのだという。一見医療に関係ないように見えがちな分野でも支援につながり得るということがわかり、国際協力の幅広さを認識できたように思う。また、一緒に講義を受けさせていただいた 2 人の訓練生の方がそれぞれの経歴をお話してくださったのだが、そのうちお一人はこれまで日本で医療事務の仕事をきており、その知識を活かしてガーナの医療機関における教育分野で活動する予定、もう一人は看護師としての経歴を活かしケニアにおける感染症の予防啓発やコミュニティへの働きかけなどを行う予定だという。この講義の聴講を通して、「感染症・エイズ対策」という一つの分野で活動しようと考えている方々の中にも多様性があることに気づくことができた。それに加え、訓練生との交流会やディスカッションを通して、分野を超えたさらに多様な訓練生の経歴や目標を知ることができたのである。私は日本語教育を副プログラムとして履修しているということもあり、日本語教育を専門分野としている方の交流会のお話が印象深かった。その方は、日本における外国人が罪を犯した場合、99%が祖国に強制送還されてしまうことを深刻な問題だと考えている。日本語教育を通して外国人に日

本に関する知識を身につけてもらうことで、日本における外国人の犯罪を減らしていきたい、またゆくゆくは日本における外国人犯罪者が再び日本で生活をやり直せるような社会の基盤を作りたいという思いを抱いて協力隊を志したという。また別の方は、これまで自動車整備士として働いてきたなかで、日本における自動車整備士の人口減少を危惧するようになったという。ガーナで整備士として活動することで、海外における整備士の状況や現地のニーズを学び、帰国後は日本の整備士人口の増加に寄与していきたいと考えている。その他にも、これまでエンジニアとして働いていた自分の経験を活動に活かしていこうと考えている方や、銀行に勤めていた経験を活かして金融分野でのコミュニティ開発に関わることで新たな人生経験を得たいと考えている方など、さまざまな経歴を持った方々の話を伺った。このような訓練生の方々との対話を通して、彼らはそれぞれ多様なバックグラウンドを持ち、自分自身の経験や特性を協力隊の活動に反映させていこうとしているということをより理解することができたと思う。ただ、一人一人異なる目標を持ってはいるものの、それらは全て「人の役に立ちたい」という彼らに共通した強い思いのもとにある目標のように思えた。私はまだあまり将来自分が何をしたいかということが定まっていないうが、今後自分が「人のために」働くうえで強みにできるものは何かを考えながら、彼らのように強い意志を持ち目標に向かって生きる姿勢を私も見習っていきたいと思った。また、海外で活動する上で忘れてはいけない大切なことに改めて気がついた。それは、「日本の文化を当たり前と思わない」ということである。例えば、食事の前に手を洗う習慣のない国で、手を洗うように呼びかけただけではなかなか浸透しないという。どうして手を洗う必要があるのかということを説明し、きちんと理解してもらったうえで働きかけなければ、単なる押しつけになりかねない。協力隊として海外で活動する上では、異文化を理解し受け入れていこうとするだけでなく、「自文化中心」の考え方にならないようにする姿勢も必要なのだと思う。この二日間を通して、国際協力という分野をより多面的に捉えられるようになったように思う。永井さんがおっしゃっていたように、学生である今は学びに集中し、今回の経験を活かしなが



JICA 二本松 広報展示室にて

ら国際協力について考え続けていきたい。

2. NPO 法人コーヒータ임訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は、後期に履修していた多文化共生論という授業で「障害者と社会の関わり」ということについて学んだばかりであった。その授業で、「障害を理由とする差別」を解消するべく制定された「障害者差別解消法」が今年4月より施行されることを知り、障害を持った方が生活していく上でどのようなことに不便や困難を感じているのかということに疑問を持ち、今回の訪問を通して考えてみたいと思った。また、授業の中で行われたヒューマン

ライブラリーという企画に参加した際、発達障害を持つ息子さんがいらっしゃる方とお話させていただく機会があった。その息子さんは地域の就労支援センターを通してご自身に合う仕事を見つけて就職したということを伺ったので、障害者の方の社会参加を支援している団体が具体的にどのような活動をしているのかを見てみたいとも考えていたのである。実際に訪問し、橋本さんのお話を聞いて印象に残ったのは、「ここに障害を持った人への偏見を取り除いていきたい」とおっしゃっていたことだ。根拠のない偏見が生まれてしまう原因としては、障害を持つ方々について「よく知らない」という人が多いことが挙げられると思う。私もこれまで障害者の方と接する機会はあまりなく、前述した多文化共生論の授業を通してさまざまなことを知り、考えるようになった。障害を持つ方々は社会においてマイノリティである分、彼らが暮らしやすい社会を目指していくことは後回しにされがちな印象がある。今日の社会に少なからずある偏見を取り除いていくには、コーヒータムのような場所が行っている仕事、つまり「障害を持っているからこそできる丁寧な仕事」をまずは地域に根付かせ、認知度を上げていくことではないだろうか。橋本さんは、障害を持つ方々の長所として「心がまっすぐ」だとおっしゃっていたが、このことを聞いた時、私は同じことを多文化共生論でのヒューマンライブラリーでお話した方からも聞いたことを思い出した。邪念を持たず、誠実に仕事に取り組めることがまさに、「障害を持っているからこそできる仕事」なのだろうと思った。このような活動の周知を通して人々の理解を得ていくことで地域との関係が近くなるのではないだろうか。コーヒータムを訪れたことで、自分の住む地域でも障害者の方々がお菓子や雑貨を作って区役所で販売していることを思い出し、地元にはどのような就労継続支援事業所がありどのような活動を行っているのかということについても詳しく知りたいと思った。また、実際に訪問してもう一つ実感したのは、震災の影響の大きさである。コーヒータムは浪江町から移転せざるを得なかっただけでなく、風評被害により商品が売れず仕事なくなるなどの苦労を経験してきたという。震災から5年が経とうとしているが、未だに解決されていない問題は多い。だが、浪江町で暮らしていた方々の状況を今回実際にお聞きしたことで、今まで新聞やテレビや本でしかわからなかった、震災の影響への理解が深まったように思う。何かを知るには、実際にその地を訪れ、人々の生の声を聞く交流をすることが大切だということを強く感じた。今回の経験をきっかけに、これまでよりも積極的に震災と復興ということ

について学び、自分にできることを考え続けていきたいと思った。



コーヒータム事務所入口

佐藤 知香

お茶の水女子大学生生活科学部人間生活学科 1 年

JICA 二本松での講義は、環境教育の授業を選択した。2 人の訓練生が、自分たちが訓練所で行ったふりかけ作りのワークショップについて発表していた。大変なことも多い訓練生活の中で、そのようなワークショップを企画して行うのも、参加するのも楽しそうだった。また、その企画の目的にあったように、参加者が環境教育について学び、自分たちの分野と結びつけて考えることも楽しいだろうと思った。講義について、先生が色々ご指摘をされ、訓練生たちはプレッシャーをたくさん感じていたようだった。葛藤や喧嘩が起こる可能性は派遣先でもありうると聞いて、この訓練生活を乗り越えてやっと派遣され、2 年間の勤務が始まるという、青年海外協力隊の大変さを改めて実感した。

コーヒータイムを訪問した際は、施設の職員や利用者のお話を聞き、震災の年の夏につくられたドキュメンタリーを見た。私は今となっては放射能を全然気にしていないので、ドキュメンタリーを見て、なぜそんなに避難区域への立ち入りに厳しい規制がかけられているのかよく分からず、放射能自体よりもそうした規制などが、現地の方々にとってかわいそうだったと思った。放射能の身体への影響については様々な情報が飛び交っており、「半径 100km の区域の住民まで避難しなければならない」という人もいれば、「放射能は安全だ、気にして心配になるから癌になってしまうのだ、だから原発は大丈夫」などと言う人もいて、正確なことは全然分からない。とにかく今の時点で言えるのは、放射能は、避難や規制や風評被害で福島の人々をいじめるだけのものであるということだ。お話を聞いた後は、事務所とお店を見学した。私は自宅のすぐ近くに障がい者センターがあり、そこで開催されるお祭りに行ったりして、障がい者の方々とは昔からよく関わってきたため、コーヒータイムには親近感がある。私が小さい頃から身近で見てきた障がい者やその支援者と同じような方々が被災し、避難を余儀なくされて、それでも人々のために仕事を続けてがんばっているのだ。いずれは浪江に戻るつもりなのか、それともずっと二本松で活動していくのか、風評被害にあったことはあるかということもお聞きしたかった。また、私の地元のような大都市の真ん中と、福島のような田舎で、障がい者に対する周りの人々の見方や考え方に違いはあるのか、障がい者の社会保障やノーマライゼーションなどの制度はどの程度あるのかということも疑問に思った。お店で売っている雑貨は、私の地元のセンターが売っているものよりかわいくて値段もお手頃だったので、私の地元の方々も参考にしてくれたらうれしいなと思った。

国際協力についてだが、私は募金活動やユニセフといった言葉には小学校に入った頃から敏感であり、青年海外協力隊になりたいと思い始めたのも小学校高学年になってそれを知った時からだ。国際交流や世界の食べ物にも幼い頃から興味があり、食べ物を中心に東南アジアに特に興味がある。また、アフリカの飢餓問題などにも「何とかしなければ

ば」という気持ちをずっと抱いていた。最近では日本から比較的近くて、最も興味がある東南アジアの国に支援に行きたいと思っている。子どもと遊ぶのが昔から好きなので、どこかの国に行っても子どもたちと関わるような仕事がしたい。自分の生まれ持つ特技を生かせる仕事は非常にやりがいがあると思う。被災地支援について、私は親戚がいる福島を特に応援しており、物産展で福島のコーナーを見つけると「伊達に親戚がいます、がんばってください」といつも声を掛けている。震災当時は、原発に比較的近い伊達に住む親戚たちを本気で心配した。その年、毎年桃を送ってくださる伊達の叔父が「風評被害に負けない」という旨の記事を新聞に投稿し、いつものようにおいしい桃がうちに届いた。その頃私も、夏休みの宿題で「なくせ福島の風評被害」と題した作文を書いたり、風評被害について有線放送のクリスチャン番組で意見を述べたりした。5年経った今でも、震災が終わったとは断じて言えない。東日本大震災からの復興にあたって大きな課題をたくさん抱えていて、地震大国日本は、今後起こりうる災害にはどう対処していくのだろうか。自分も防災については、物理的にも精神的にも普段から意識し、東北の、否、日本の復興にもできる範囲で、これからも協力していきたい。実際に東北を訪れて、改めてそのようなことを考えさせられた。

今回のイベントに参加し、長年夢見てきた青年海外協力隊の当事者の方々とお話しできて様々なことを学べたのは本当に良かった。また、なかなか訪れる機会のない福島に行き、地元の方々と関わったのはとてもうれしかった。帰ってきて今、疲れるどころか、「もっと何かしたい」「今訓練生になってもいい」というような気持ちがますます湧いている。2日目の朝のランニングが全然辛くなかったのも、そうした気持ちが芽生えていたからだ。私は東南アジアに興味があるため、訓練生になったら今回宿泊したところに行くだろう。訓練所にいる間、自分が訓練生になったのを思い描いていたが、勉強や毎日の生活など厳しいことがたくさんあるということを、滞在中の様々な場面で身をもって感じた。これには若干ひるんだが、自分なら「この国に行ってこれをやりたいんだ!」という熱意があれば何だって乗り越えようとすると思う。ふりかけ作りのような、同僚のワークショップに参加したり、休日には山を下りて大好きな福島の人々に尽くしたりするのもとても楽しいだろう。楽しむことは思いっきり楽しんで、大変なことを乗り越えていきたいと思う。帰宅した日の夜、先述の私が出演した番組を久々に見てみたが、本気で泣いてしまった。震災当時の出来事や気持ちがありありと語られていて、自分の才能や夢、話し方も、今と全く変わっていない。自分が生きていくうえで本当に大切なことが、そんなに前から実は分かっていたこと、おそらく生まれてはじめて感動で泣いたことに、とてもびっくりした。国際協力、その他のボランティアについても、自分が昔から持っている夢が一步一步実現していくことは、果てしなくうれしいことだと思うし、そうした生まれ持つものを忘れてたり捨てたり、傲慢になったりすると自分に返ってくるということも、多分よく分かっている。コーヒータイム訪問の際、地元の方々とお話しして思ったが、東北の方々はとてもい

い人たちで、周りの人の目ばかり気にして物欲にまみれた私たち都会人が忘れがちな、人と人との触れ合いや絆の大切さを本当によく知っている。この2日間で、自分の普段の生活を、距離をおいて見つめなおすことができた。番組に出演するにしても作文や小説を書くにしても、自分が何かを言い、書けば、自然とそうした大切なもの、自分が本当にしたいことが見えてくる。どんな時でもそれを信じていけばいいのだと思う。このイベントを通して考えたことを忘れないように、早速今月末の気仙沼での学習支援ボランティアで、否、普段の生活、自分が参加する活動の1つ1つで、今回学んだことを生かしていきたい。

とてもいい経験ができました。お世話になった皆様、お話ししてくださった皆様、本当にありがとうございました。



東北本線@二本松駅

二本松では、電車ばかり撮っていた。本数も少なく、汽笛を鳴らしてのびのびと走っている姿は、東京でぎゅうぎゅう詰めの人を乗せて忙しく働かされている電車たちに比べてとても幸せそうだった。都会や田舎での人間の生きざまは電車にまで表れるのだと分かった。都会で暮らしている人は誰でも、たまには田舎を訪れることが大切だ。同じように、自分が訓練生になった時、忙しい毎日に追われていても、自由時間には町に出て地元の方々と交流することで、人との絆の大切さを忘れないでいられるだろうし、自分が青年海外協力隊を目指している意味も改めて考えなおすことができるだろう。

高嶋 早紀

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回、JICA 二本松訓練所で伺いたかった質問のひとつに「国際協力とはそもそもなんであるか」という疑問があった。大学の別の講義の中で出てきた問いであるが、その場では意見が対立し収束しなかった。NGO や青年海外協力隊のように直接海外に行って活動することが真の「国際協力」なのか、高所得者が気まぐれに行う募金や 24 時間テレビのような見世物に近いチャリティを同じ「国際協力」として括ることへの拒絶感を持つ学生もいたからだ。しかしながら、洲崎所長や訓練生の方々のお話を聞いていると、そういった話はあくまで机上の論理で、それが実際の現場で何か影響を与えるかといえばそうではない、国際協力は現場を見なければ意味がないということを痛感した。エイズ患者ひとりを助けることを例にとっても、ただ薬を寄付する、医者を派遣する、病院を建てるだけでは不十分で、そこには薬を運搬する人、患者を病院に連れていく人、患者のアフターケアをする人など多くのアクターが関わっており、その全てが合わさってひとつの「国際協力」になっている。「国際」という名前がつくが故に、私たちは規模の大きい「協力」をイメージしがちだが、マクロの協力が成り立つにはミクロの協力が不可欠である。その点を考慮すれば、ミクロの協力もある側面では重要な「国際協力」の一部分を担っている。「現場を見ていれば小学生でも何かが出来る」という洲崎所長のお言葉は私自身の国際協力に対する考え方を大きく変えた。出来る人が出来ることをするのが重要であって、それが現地のニーズに合っていれば、それが一過性のボランティアでも、募金でも、チャリティでもマクロの協力には重要な一端になっていることが認識できた。

また、最初から完璧な国際協力など存在しないということも心に残った。「国際協力」は何度も経験して失敗と反省を繰り返し、成功の法則を見つけていくことが常態化する分野である。理念だけを論じるのではなく、実際に経験することの重要性を改めて実感した。

2. NPO 法人コーヒータイム訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと

震災からの復興支援ではなく、障がい者が社会に出て自立するための第一歩を支援する NPO 法人であることを全体の印象として受け取った。実際に事業所に出向いてペンや焼きそばの調味料を梱包する作業の様子を見せて頂いた時、職員の方が、「皆がそれぞれ得意な仕事を分担している」とおっしゃっていたのが印象的であった。それは洲崎所長の「様々な過程でそれぞれの人材が必要」「誰でも何かが出来る」というお話と通じる所があり、何も障がい者支援だけではなく国際協力のあり方そのものにも当てはまることが目の前で実践されているのだと思うと、非常に感慨深かった。

JICA 二本松訓練所で障がい児・障がい者支援の要請を受けてガーナに向かう方のお話を伺った時、障がい者支援は開発の過程で後手に回される傾向にあるということが話題に

上った。それは、コーヒータ임을訪問した際に強烈に感じたことでもあった。東日本大震災の際、被災者ではなかった私が目にした情報は全て健常者のものであった。メディアも津波・原発事故の被害やそれに伴う避難者たちにフォーカスするばかりで、障がい者をトピックとした災害支援状況は自分で意識して調べなければ情報を手に入れることが出来なかったように思う。災害時の情報に、老人・子ども・妊婦だけでなく障がい者を加えた災害弱者の状況を積極的に加えていくことが求められているのではないだろうか。そうすることで、常備薬の不足や環境変化による症状の悪化でその後の社会復帰の機会が奪われる確率が減少するのでは、と考える。

最後に、コーヒータ임で伺ったお話とは直接関係のない話ではあるが、私が訪問の際、最初に感じたことは NPO 法人コーヒータ임の立地の良さであった。駅の近くであるということと、他に地域の人々が利用する複合施設（二本松市市民交流センター）で運営されていることは、より障がい者が自然な形で人目に触れる機会が増すということである。代表の橋本さんがおっしゃっていたように、障がい者に対する偏見は深刻なもので、それが障がい者の方々の社会参加を阻んでいる。現行の日本の義務教育システムにおいては障がい者に対する正しい知識を得られない。このような地域に根差した障がい者と健常者が交流する場は、障がい者への負のイメージを払しょくする一助となる。

3. 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

国際協力とはマニュアルのない学問であり、分野であるからこそ、支援側と被支援側が学び合うことでより良い先例・実例をつくり出していくことが重要であることが分かった。青年海外協力隊では、二年間という短期間に、オープンな関係で、どれだけ自分をさらけ出せるか、どれだけ相手を理解しようと努力できるかに全てがかかっているといっても過言ではない。また、相互理解は国際協力の現場だけではなく、私たちの日常生活でも特にこれから必要になってきている。洲崎所長は一国平和主義から脱し、「世界の中の日本」を基軸として日本の問題を考えるべきだとおっしゃっていたが、実状はそれに逆行しているように感じられる。日本では ODA の重要性を疑問視する若者が増加し、EU の難民状況を見て自国の難民申請基準の厳しさに胸をなでおろす人が後を絶たない。しかし、それでは短期的な安定は得られるが長期的な日本の利益には及ばないことが明白であるし、そのことをより多くの人々が理解するべきである。日本は今、これまでの価値観から脱却する時が来ているのではないだろうか。

災害時の障がい者支援は、まず、「被災者」とひとくくりにしないことから始まる。避難民、被災者とひとくくりにすることは障がい者に限らず、老人や妊婦それぞれのニーズに合った支援が必要だという事実を見えにくくさせる弊害を持つ。災害時、メディアを受動的に使用しているだけでは、「何が起こったのか」は理解できても、「何が必要とされているのか」「自分は何をすべきか」までは分からない。受動的にメディアを利用し、かつ、普段から災害弱者の存在を認識していくことで、いざという時に正しい選択が出来るので

はないだろうか。

4. 今後の学習や研究に向けた抱負

今後の抱負としては、まず、今回伺った「国際協力とは何か」を問いの出た講義に持ち帰り、他学生に紹介することである。理念よりも行動を呼びかけていくと同時に、自分自身も更なる行動の場を積極的に広げていきたい。特に、その際は「協力活動手法」で聴講したワークショップ手法とファシリテーターとしての役割を活用できればと思っている。また、ODA に対する若年層の評価が低いことを知ったので、現在行っている JICA のボランティアを通じて若い人たちにどう ODA の必要性を伝えるかを自分なりに考え、実行していきたい。

花岡 瑞月

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科 1 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA 二本松でのプログラムのなかで一番印象深かったのは、訓練生の方々とのディスカッションでした。さまざまなアドバイスや貴重な体験談を伺うことができましたが、そのなかでも特に印象的だったのは「好きなことをやってください」という言葉と、「日本国内、たとえば自分の住んでいる地域で周囲の人をまきこんで何かのプロジェクト等をやってみたほうがいい」という助言です。好きなことや目標をまっすぐ追いかけていれば困難や大変なことがあってもそれに向かって努力することができるし、簡単にはへこたれないという言葉聞いて、目標に向かって前向きに努力する姿勢と、それがたとえ楽な道でなくても好きなことを追い求める生き方にとっても感銘を受けました。また、日本国内で何かボランティア活動等をしたことがないといきなり海外で活動するのは難しい、だから自分の周囲のコミュニティで何かしら行動を起こしたほうがいい、というお話を聞き、私が兼ねてから目標にしている「大学生のうちにいろいろなことを経験する」ということの方角性が少し明確になるきっかけとなりました。

そしてコミュニティ開発に関しての講義もとても興味深く、真剣かつ積極的に講義を受ける訓練生のみなさんの姿に、「訓練生はみんな人生をかけて勉強している」という永井さんのお言葉を思い出さずにはいられませんでした。青年海外協力隊に参加することに関心があるものの、これといった資格や技術を持っていないことからコミュニティ開発や青少年活動などといった職種に興味を持っていた私にとって、「コミュニティ開発は技術も資格も要らないのではなく、自分の持っている知識や経験をいかに活かしていくかが重要な職種だ」という言葉は大きな気づきを与えてくれました。コミュニティ開発という職種においては、こうすれば必ずうまくいくというような普遍的な活動手法がなく、自分の知識や経験に基づくオリジナリティをプロジェクトに落とし込む必要があり、その点が魅力的な部分でもあり難しい部分でもあるのではないかと思います。柔軟な発想と地域の課題を見つけ出す観察力と地域に適応するためのコミュニケーション能力の重要性を改めて感じました。

JICA 二本松ではこれから各国に派遣される訓練生の方々、派遣された経験のあるスタッフの方などから貴重なお話をいただくことができ、どのお話のなかからもみなさんの熱意や行動力、積極性がひしひしと伝わってきて、とてもいい刺激を受けることができました。今の自分に足りていないもの、これからどのようにしてそれを埋めていくかを改めて考える良い機会になったと思っています。

2. NPO 法人コーヒータイム訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと

NPO 法人コーヒータイムでは、普段の活動や震災のあとの困難などについてお話を伺っただけでなく、利用者の方が仕事をしている作業所まで見学させていただき、職員と利用者が和気あいあいと作業所で活動をしているところを実際に見て、支援する側とされる側という枠を超えた、人と人とのつながりを強く感じました。「支援をする側」と「支援される側」といった枠組みがはっきりと存在してしまいがちな国際協力のフィールドにおいてもこのような関係性をつくり、お互いが相手のことをよく考え尊重して対等なパートナーシップのなかで互いに支え合うことができれば、それが一番理想的な世界のあり方なのではないかと思います。

また、もうひとつ印象に残った出来事は、二本松市の市民交流センター前に置かれた放射線の線量計を見つめながら、「今はもう普通に生活していく上で問題ないくらいの線量になっていると言われているけど、いくら安全だと言われても心配なものは心配なんです」と橋本さんがおっしゃっていたことでした。原発事故に関しての報道もほとんどされなくなって、自分から知ろうとしない限り被災地の現状に関する情報があまり入ってこなくなった現在、東京に住んでいる私は日常生活の中で放射能の影響を気にすることはほとんどありません。しかし原発事故の影響はいまだに多くの人の生活と心に影を落としていて、現に不安な毎日を送っている人が多くいるのだということを再認識するきっかけとなりました。今までは、「震災」が身近な存在であるからこそ他人事とは思えず被災地の現状を知るのが怖いと思ってしまっている自分がいたけれど、まずは被災地に目を向けること、被災した方の声に耳を傾けるところから始めていきたいと考えています。

3. 今後の学習や研究に向けた抱負

今までの自分を振り返ってみると、国際協力や被災地支援に関心はあったものの、自分にできることなんてたかが知れているし、知識も経験もあまりない学生にできるようなことはほとんどないのではないかと考えてしまっていたように思います。しかし、JICA 二本松では「学生には学生なりにできることがある」、「実際に現地に行って支援活動をすることができなくても、今は本分である研究をして知識をできる限り増やしていけばいい」などといったアドバイスをいただき、NPO 法人コーヒータイムでは「まずは被災地の現状を自分の目で見て知ってほしい」というお言葉を聞き、自分にできることなんてないと最初から決めつけて悲観してしまうのは間違いなのではないかと思えるようになりました。たしかに今の段階で私ができることはまだまだ少ないかもしれないけれど、学生のうちに可能な限り多くの知識を身につけ、様々な経験を積み、将来的にはそれを国際協力などのフィールドに活かして社会に還元していきたいと考えています。そのために、まずは大学で開発に関する講義などを積極的に受講して知識量を増やすこと、そして実際に現地に足を運んでみて自分の目と耳でいろいろなものを見聞きする機会をなるべく多く持つことを目標に、これからの大学生活を過ごしていきたいと思っています。

今回のイベントでは JICA 二本松や NPO 法人コーヒータイムでたくさんの貴重なお話をいただいただけでなく、訓練生や職員の方々とお話をするなかで自分自身の考えを深め、今後の目標や活動の方向性を以前より明確にすることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。2 日間を通じて得た学びと自分なりに考えたことを、今後の学習に活かしていきたいと考えています。



JICA 二本松外観



JICA 二本松広報展示室



NPO 法人コーヒータイム喫茶スペース

プリマサリ・ニルワナ・デウィ 奈良女子大学生活環境学部研究生

ボランティア

ボランティアという言葉は、無給で人を助けることで、UNPAID WORK です。今まで、無給で他人を助けたりサポートしたりすることは、本当に素晴らしいことだと思います。なぜなら、みんなはそんなことをやるのが出来ませんから。特に外国に行って、言語や生活習慣や文化が違う国の人々と直接に交流し、自分自身の経験になることはすごいと思います。世界には「私たちと違う」人がいる事を直接に見たり体験したりすることが出来たら、自分の境遇がいかに幸せで感謝できるということが、分るようになると思います。ボランティアをしたかったら、何が一番必要か大事か、この二日の活動で、分るようになりました。それは意志です。

外国へのボランティア

JICA の活動は、選考後に 70 日間の訓練をしたり、色々な準備したりしなければならなくて、意志がなかったら、うまく行かないと思います。言語も自国の知識も行く国の情報も準備しなければなりません。自分の健康のために、体力も準備しなければなりません。行く国で、新しい人々に会えて、その地域でボランティアしたら、人々とながって、コミュニケーションも必要になります。特にコミュニティ開発プログラムでは、フィールド調査をしたり（どんな地域）、ニーズ調査をしたり（そのコミュニティは何が要るか）、参加型ワークショップをしたり、住民の組織化をしたり、そしてアクションプランを作成したり、モデル事業を作成しなければなりません。ボランティアとして、その状況に合わせて、自分の能力や知識を使って、プログラムを作ります。コミュニティの人々と協力して、プログラムを実施し、プログラムがうまく行くことがそのコミュニティのためです。色々な問題があるかもしれません。

でも、そのコミュニティ（人と人、人と組織、組織と組織）とながれば、ある問題も一緒に解決すること出来ます。ですから、コミュニティ開発プログラムで一番大事だと考えるのは、コミュニケーションです。コミュニケーション、コーディネーション、リーダーシップ、ファシリテーターシップです。



コミュニティ開発の授業

国内のボランティア

日本の国内のボランティアの一つは、福島県浪江町にある NPO 法人コーヒータムです。でも、2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災のため、11 月からは、二本松にあります。その NPO は、色々な作業を行っています。例えば、焼きそばソース詰め作業やボールペンの糸巻作業や委託作業や二本松市市民交流センター内で喫茶店の運営です。家族はバラバラな所にいますが、その NPO のメンバーは、みんな、一生懸命に努力して、本当に感動しました。お金だけでなく、幸せは自分が他人を助けられることだと分かりました。自分が苦しくても、他人を助けられれば、気持ちがよくなると感じます。それは、人によって、難しいかもしれません。



二本松市市民交流センター内で喫茶店の運営



糸巻きボールペン



ボールペンの糸巻作業

これから

今まで、私はボランティア活動をしたことがあります。村の子供の状況を中心に、1 ヶ月に 1 回、5 歳までの子供の体重を量ったり、健康で栄養ある食べ物をあげたり、母乳の大切さ、子供の健康の情報をしたりして、本当に楽しかったです。他人の笑顔で幸せだと感じました。2 日間、JICA ボランティアの活動を見学し、外国人がインドネシアにボランティアに来ることは、本当に良いことだと思いましたので、私も自分の国で、特に地域で、ボランティアして人々に役に立つことができれば良いと思います。これからも、自分の人生を一生懸命に頑張ったり、もっと幸せで感謝したりしたいです。日本で日本語や生活習慣や技術など色々勉強したり、経験になったりして、帰国したら国や他人に役に立ちたいと思っています。頑張ります。

政木 優子

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科 1 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

まず、所長の講義を受けての感想を述べる。「世界の中の日本」という観点から地球的規模の課題に取り組むべきだという所長のご指摘に非常に感銘を受けた。「国際協力」という文字どおり、多国間で協力して問題に取り組むことでしか、地球全体にかかわる問題を解決することはできないであろう。地球規模の問題を一国の力で解決できるはずがないというのは自明の理だ。国境を超えて協力するには、自国で起こっている問題を地球の問題と捉えることが重要だ。例えば、日本の平均気温が上がっている問題は、一見すると日本だけの問題に見えるかもしれないが、地球全体で平均してみると、地球の平均気温自体が上昇している可能性がある。ともすると自国のみで発展してきたと勘違いしてしまうかもしれないが、そもそも他国の力を借りて繁栄を収めているのだという自覚が必要だと感じた。「世界の中の日本」の観点から考えたら、「日本の中の自分」の観点から考えてみるのはどうであろうかと思った。所長が「社会に役に立つことをしなければ生まれてきた甲斐がない」と考えていたこともこれに通ずるのではないかな。日本社会の一員として、自分が少しでも貢献できることを模索することが、日本、延いては世界の役に立つように思う。

また、「国際協力学はテキストを作るための学問ではない」というお言葉をお聞きし、耳が痛い思いだった。というのも、私自身が「テキストを作るため」に勉強している節があるからである。無論、本当にテキストを作るわけではない。授業を受けてもノートにまとめて勉強したつもりになってしまうのだ。所長のお言葉を懸命にメモしつつ、ひたすら板書していると言われても否定できないことに自己矛盾を感じずにはいられなかった。本質的な学問は、実践してこそ価値があるのだろう。知識の収集に終始するのではなく、知識



写真 1 広報展示室

を集め、どのようにそれらを使っていくか考え、実践するところまで行って始めて「学んだ」と言えるのではないかな。国際協力のみにならず、学ぶとは何かということまでも深く考えさせられた。JICA 二本松の学びのスタートにふさわしい講義であったと感じている。

中沢さんと永井さんの講義も大変勉強になった。そもそも「ボランティアとは何か」という問いに、明確な答えを持っていない自分に気がついて愕然とした。ボランティアの定義ですら知らないのに、国際協力ボランティアについて学ぼうとしていた自分の傲慢ささえ感じた。国際協力の最終目標が「必要とされなくなること」だとお聞きして、ボランティアの真髄を垣間見ることができたように思う。撤退の時期をしっかりと決める、ともおっしゃっていて、何事も

引き際が肝心だというのが、決められた撤退期までに成果を収めてこそその青年海外協力隊なのだろうと思った。

協力活動手法の聴講でも、印象深い学びを得ることができた。私たちが参加させていただいたコミュニティ開発の授業では、先生がたくさんスライドをお見せくださり、視覚的にも印象深かった。青年海外協力隊のどのような隊員が現地に適応できるか、実際の隊員の方の手記を参照することで、虚飾のない協力隊の皆さんの生活を知ることができた。中でも印象に残っているのが「内と外をはっきり分ける社会で、内の人間として扱われていると感じる」という記述だ。その方がどこで活動していたのかはわからないが、よそ者、すなわち「外」として見も知らぬ土地に飛び込んでいき、「内」として扱われるようになるまでにはどれだけの苦労があったことかと思うと、感慨深いものがある。コミュニティ開発を担当する皆さんはまず現地の状況を知ることから始めるということで、赴任してしばらくは現地の方々との交流にも四苦八苦して、手探りの状況が続くのかもしれない。焦らず慌てず諦めず、と先生がなんでもないことのようにおっしゃっていたが、その三つを遂行するのは実は非常に難しいことなのだろうと感じた。

JICA 二本松への訪問全体を通して、遠い存在であると思っていた青年海外協力隊の皆さんを間近に感じることができた。「朝の集い」での人数確認から消灯時間まで細部にわたって統制化されている生活を過ごすことで、青年海外協力隊としての自覚や責任感が芽生えるのだと思った。語学の授業を受けている時や講義で不適応隊員についてのお話を聞いている時など、真剣そのものの表情は、まさに「人生をかけて勉強している」という形容がぴったり当てはまる様子だった。一方で、食事を一緒にさせていただき廊下ですれ違った時は気さくにお話をしてくださり、人格者とはこういう人たちのことを言うのだろうと思った。

2. NPO 法人コーヒータイム訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと

お話をしてくださった橋本さんや志賀さんのあたたかい微笑みは何よりも印象に残っている。コーヒータイムの皆さんは震災で何度も避難場所を転々とする、事業所を転居することなどを余儀なくされ、苦労なされたのだろうが、そのような苦労も優しさに変えているのだろうかと思わせるような優しい笑顔をお見せくださった。いただいたコーヒーを飲みながら震災後の様子を切り取った映像を見たりお話を聞いたりしているうちに、コーヒータイムの皆さん同士は、心で深い繋がりを持っているのだとわかった。橋本さんがしみじみと「最後は人と人との付き合い」だとおっしゃったことは、本当にその通りだと感じた。コーヒータイムの方々皆が体現していることであると思う。

金色事務所を見学させていただいた折は、一つ一つの「つながりのボールペン」を丁寧に袋詰めする様子が特に印象的だった。こうした精魂こめたお仕事が「つながりのボールペン」を生んでいるのだと思うと、見ているこちらまであたたかい気持ちになった。



写真2 魔法のお菓子「ぼるぼろん」

喫茶店で商品を何点か購入したのだが、その中の一つ「ぼるぼろん」(写真2)は福島県の11の事業所で209人が協働で作っているということだ。「ぼるぼろん」は人と人とのつながりが形として現れている、皆さんの努力の結晶だと感じた。家族全員で美味しくいただいた。

3. 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

JICA 二本松で青年海外協力隊の皆さんの訓練を体験させていただいたこと、NPO 法人 コーヒータイムを訪問させていただいたこと、今回のプログラムはこの二つの柱が中心だったと思うが、どちらの体験にも共通して「協力」という言葉が挙げられるのではないかと考えた。青年海外協力隊として日本から現地に向かうのは一人かもしれないが、決してその方が一人で開発を試みるわけではない。現地の人々と意思疎通を図り、彼らと協力して目標を達成させるのだ。コーヒータイムの事業所の皆さんに関してもそうだ。すなわち、一人だけで作業しているわけではない。私たちが訪問した際、働いていらっしゃる方々の一人が一本の「つながりのボールペン」についていたわずかな傷を見て、隣にいた方に「これはどうしたらよいのだろう」といった質問をしていた。質問された方は、首をひねりながらも懸命に考え、二人で結論を出していらしかった。

国際協力をするにしても被災地支援ボランティアをするにしても、「協力」、つまり「ある目的に向かって力を合わせる」ということがキーワードになるのだと思った。確かに、国際協力は日本と外国、被災地支援ボランティアは国と被災地、または個人と被災地、というように協力する対象は異なるだろう。しかし、一つの目的に向かってともに力を尽くすという本質は何ら変わらないのだと思う。将来、いや、将来に限らず私がどのような形で国際協力や被災地支援ボランティアに関わるのかはまだわからない。しかし、どのような形にしろ、「協力」する、ということのを常に心に留めて活動に励みたい。

貴重な機会をくださった皆さま、本当にありがとうございました。



写真3 コーヒータイム金色事務所



写真4 JICA 二本松

増田 奈津実

奈良女子大学理学部数学科 3 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA 二本松所長の洲崎さんの講座「JICA 事業・JICA ボランティアとは」を聞いて、ボランティアは誰にでもできることだということを学んだ。現在国内では少子化、高齢化が深刻になっており、日本に危機が迫っている。従来のやり方で安定を求めているだけではだめで、「一国平和主義」からの脱却が不可欠である。洲崎さんによると今の日本の危機はチャンスでもあり、世界の中の日本の国際協力を考える機会であると仰った。それを聞き、これからの日本を作っていくのは私たちで、日本のために、世界のために何をすればよいのか、私たちが考えなければならないのだと実感した。また、私は国際協力ボランティアは何か専門的な技術がなくてはならないと思っていたが、講座で、患者を見つけること、患者を病院へ連れて行くことは誰にでもできることで、これも立派なボランティアであると学んだ。金持ちの生活＝幸せとは限らない。「他者に喜ばれている」ことが生きがいのある幸せな人生で、国際協力活動は自分自身のためにする、という考え方も知った。これから就職活動があり、安定した生活を手に入れたいと考えていたが、現在のままでは日本は少子化、高齢化で様々な問題が起こってしまうので、自分だけ安定した生活を送ろうという考えはいけないのだろうと思った。自分が安定したいのならば、皆で安定した生活を送れるようになる必要があるのだと気づいた。そのためには日本、世界を変えていく必要があり、これからの日本を私たちが作るのだという意識を持たないといけないと感じた。自分が幸せになるということは周りの皆が幸せであることなので、他者に喜ばれることを生きがいにして生きていきたい。

コミュニティ開発の協力活動手法の聴講では、コミュニティ開発の分野はどこにでも適合する手法はなく、臨機応変に対応をすることが必要であると言っていた。コミュニティ開発で派遣される隊員は皆仲が良さそうで、笑いが溢れていた。コミュニケーション能力が高いと感じた。授業では不適応隊員の性質として、生活能力、適応能力、コミュニケーション能力が乏しい、自分の技量、能力、情熱と相手の期待、希望の格差に適応できないと習った。派遣されて1年目は自分には向いていないと思って落ち込む隊員が多いらしい。協力隊で上手くやるには、誰とでも仲良くできるような、コミュニケーション能力が必要なのだと感じた。コミュニケーション能力とは語学力とは違って、語学ができなくてもコミュニケーションはとれるのだということも学び、コミュニケーション能力とは面白い能力だと改めて思った。自分にコミュニケーション能力があるのかどうか、自分でもよく分からない。しかしコミュニティ開発で派遣される人々を見て、私もこのような楽しそうな、コミュニケーション能力の高い人になりたいと思った。

JICA スタッフ中沢舞さんのコミュニティ開発でのキルギスの体験談では、キルギスと

いう国について、活動について教えてもらった。中沢さんは東日本大震災がきっかけで、人生何が起こるかわからない、人と関わりたいと思い、協力隊になった。キルギスの生活は住居が組み立て式で、羊の皮で出来ていたり、トイレは外で、10年に1回汚物を埋めて、新しいトイレを作ったりなど、日本とはかけ離れた生活で、とても興味深かった。お金がなくても生きる力があれば生きていけるのだと思った。日本人のような現代人はお金が無いと生きていけないので、生きる力がなく、様々な物に頼りきっているなど感じた。活動では、フェルトで小さな小物を作り、外国人旅行者が買いやすいお土産を作ったと言っていた。それまでは大きな絨毯などしか売ってなくて、観光客にあまり買ってもらえなかったらしい。小さな小物を作ることはキルギスの人にも出来ることだが、キルギスには日本に当たり前にあるお土産屋がないので、小さな小物を作ると良いという発想が浮かばなかった。そういう日本では当たり前の発想を教えることもボランティアとして重要な活動であるのだと知った。また、困ったこととして、キルギス人同士がお互い信用しない、情報交換しない、ということを知り、貧しい国と発展した国の違いは国民の性格が大きく関係しているのかもしれないと思った。

訓練生とのディスカッションでは、協力隊に行こうと思ったきっかけや行きたいと思った時期など、皆様々で面白かった。小さい時から考えていた人は就職の時は国際関係に寄与できる会社を選んだりしていて、意志が固いなど尊敬した。また就職の時は考えていなくて、若いうちに世界へ出て行動したいと思ったという人もいた。人生を楽しんでいる様子で、見習いたいと思った。2年後のことは、国際協力の現場で生きていきたい人もいれば、まだ決めていない人もいた。しかし皆不安はないと言っていて、度胸があって強い人々だと思った。研修所の生活も充実していて楽しいと言っていて、皆同じ志があるから仲良くなれると言っていた。同じ志の人と一緒に生活するのはとても幸せなことだろうと思った。私は夢がよく変わったり、現実的に物事を見てしまったりするので、一生変わらない人生の目標を見つけたいと思った。私たちが質問をすると、倍くらいの量の答えが返ってきて、本当に国際協力ボランティアについて熱い思いを持っているのだと感じた。また、ボランティア精神を常に持っていて、優しい人達だと感じた。私もこのような素敵な人になりたいと思った。

2. NPO 法人コーヒータイト訪問を通じて感じたこと・考えたこと

コーヒータイトは以前浪江町にあったが、東日本大震災で二本松市の市民交流センターに移った。被災した人々はまず民宿や旅館に避難した。はじめは良かったが、何日もいると毎日同じメニューのご飯でしんどくなったと言っていた。次に仮設住宅に住んだが、すぐにカビが生えてしまってあまり快適ではなかったらしい。私たちは家があるのが当たり前で、被災して家がなくなったときのことは想像できないが、話を聞くことで考えるきっかけとなり勉強になった。コーヒータイトでは精神的な障がいのある方が働いていた。統合失調症の方は、一人でいるときに幻聴が聞こえてしまうが、コーヒータイトにいるとき

は聞こえないらしい。コーヒータイムでは皆同じ悩みのある人が集まっているため、安心できるのだろうと思った。精神的な障がいがある人の悩みは、なかなか普通の人には分かってもらえないため、コーヒータイムから出るのが怖くて社会に出られないのだろうと思った。精神的障がいを持つ人について私たちがもっと理解してあげれば、障がい者が社会に出やすくなるのではと考えた。作業所の見学をすると、黙々と作業をしていた。見た目は皆普通の人と同じように見えたが、私たちが入ると少し恥ずかしそうにしていた。しかし外から人が来たことで恥ずかしいのと少し嬉しい気持ちを持ってもらえたのではないかと感じた。やはり皆社会に出て行きたいと考えているが、怖いのだろうと思った。コーヒータイムオリジナルのペンを作っていて、カラフルな糸を組み合わせ、何通りものデザインのペンを作っていた。器用な作業をしていて、普通に仕事ができるのではないかと考えた。ただ人との関わりが苦手で、普通の人と一緒に働くことが出来ないのだろうと感じた。皆正直で素直で優しすぎる場所があるらしく、社会に出ると優しすぎるのではやっけないと聞いた。私たちは皆優しい人になりたいと思うが、人にはバランスが必要だと気づいた。社会に出ると辛いことがたくさんあると聞いたことがあるので、私も社会に出るのが嫌だと思うときがある。しかし、ずっと辛いことがない、刺激がない生活をしていると、嬉しい気持ちや満足感が少ないだろう。辛いことも経験することで、ささいなことに嬉しさを感じたり、楽しさが倍増したりすると思う。障がい者の方たちも、いつか社会へ出て活躍し、楽しい生活を送ってほしい。そのためには私たちの理解が必要で、障がい者の方に会った時は、出来るだけ優しくしてあげないといけないと思った。人と人は助け合って生きていく必要があるのだと学んだ。



三浦 詩歩

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科 1 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私はもともと JICA の仕事や青年海外協力隊に興味があったので、今回の講義、ディスカッションすべてに学びと発見があった。

ずっと学んでみたかった「コミュニティ開発」の講義を聞くことができたことは私にとって特に学びのあるものだった。講師である結城先生は、終始「コミュニティ開発には、どこでも適合するような普遍的な活動手法はない」ということをおっしゃっていた。マニュアルはないのだから、自分の持っている能力を最大限に生かし、ちょっとしたアイデアとオリジナリティが成功につながるという考えは、今までの私にはなかったことだったので驚いたと同時に感心させられた。民族も、風土も地域もすべてが異なる場で、常に成功するやり方があるほうが驚きだと思った。焦らず、慌てず、諦めず、現場に、現地の人に近い場所で活動することが成功のカギだと学んだ。常に臨機応変に創造的に対応することが充実した活動を行うために必要とのことだったので今後意識していきたいと思った。また、JICA 訓練生とのディスカッションも有意義なものだった。私が話を聞いた方みんなが仕事を辞めた経験があった。私は青年海外協力隊に参加したい、JICA や国際機関で国際協力・ボランティアの仕事がしたいと思ってはいるものの、新卒で参加するか、一度就職するのかということは具体的に決めていなかったしずっと迷っていた。しかし、今回訓練生とのお話の中で、就職してから、新卒で、休学して…やり方は人それぞれだし正解はないよということ言われて少し自分の未来が明るくなった気がした。まだ迷って、じっくり考えていいのかなと思ったら少し視界が開けたような気がした。自分だからできること、学生だからできること、はじめから完璧になんてできないから動いてみて、失敗してみることが大切。「他者に喜ばれている」そう実感できる暮らしこそが生きがいのある幸せな人生。という言葉は私に新しい価値観を与えてくれた。今回の JICA 二本松での経験は本当に有意義なものであり、将来に繋がる貴重な財産になった。

2. NPO 法人コーヒータイトム訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと

NPO 法人コーヒータイトムの存在は今回初めて知ったものだった。福島原発事故でもともとあったコーヒータイトムの場所に戻ることができず、今二本松に移転して活動を行っているということだった。NPO 法人コーヒータイトムを訪問した際に感じたことは「いつでも戻ってきたい空間」がそこにあるということだ。震災があつてバラバラになってしまってももう一度コーヒータイトムに戻りたいと思ったというお話だったり、携帯などを使って連絡をとれる人とは連絡を取っていたりというお話から、コーヒータイトムで働く方々が家族のような空間を作っているように感じた。また、統合失調症という障がいをもっている方も、「コーヒータイトムで働いているときは何ともないんです。」とおっしゃっていて、

安心できる空間、安心して働ける場所ができているんだなと思った。製作所を訪問した際にもみんなが黙々と手を動かしていて、自分の役割に責任をもって働いている姿を見て、障がいがある方だということを忘れて作業に見入ってしまった。障がいがある、無いということを意識するほうがばからしいなと思った。特にボールペンの製作作業を見学させてもらったが、ほんとに素敵なものを作られていた。糸の巻き方などはその人自身にお任せという話だった。最後のお話で、精神的な障がいがあると、危ない人、異常な人というような偏見で見られてしまうけれど、そんなことはないというお話があり、私も偏見を持っていたと気が付いた。コーヒータ임の方々の温かさに触れたからこそ、自分の偏見に気が付けたのかもしれない。そうした意味でも今回コーヒータ임にお邪魔させていただくことができてよかったと思った。

3. 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

国際協力や被災地支援ボランティアは今までも何度か行ってきてはいたが、それが本当に相手のためになっていたのか疑問だった。自分の自己満足で終わってしまっているのではないかという不安もあった。しかし、JICA でのお話を通して、まずは自分のできることを最大限にやることが大切だと分かった。「ボランティア」には、①誰かのためになる（公益性）②自分一人にならない（社会性）③サービスの対象者からお金を得ない（無償性）④命令されない（自発性）⑤自分のためになって楽しめる（自分の喜びとなる）という 5 つの要素が必要だと学んだ。今自分がやっていることが、意味のあることだと信じてとにかく自分の能力を最大限に生かしていこうと思った。また、「ボランティア」の 5 つの要素を踏まえてできることを探していくことが、将来、自分がやりたい国際協力の仕事に繋がっていくと感じた。

被災地支援ボランティアも、地元が岩手ということもあり、何度も足を運んでいた。しかし岩手にいるときも直接の被害にあったわけでもなく、東京に出てきてからはなおさら「外部者」という意識があった。しかしそういったことを感じていたとしても、まずは継続して足を運び、現地の人と交流していくことが必要だと思った。自分の心の中の葛藤のヒントや答えが得られたので自分自身かなり有益な時間と経験だった。

4. 今後の学習や研究に向けた抱負

今回のプログラムを通して、一段と国際協力、ボランティアの仕事がしたいと思うようになったし、それに通ずる勉強がしたいと思った。学生の私だからこそできることがある、できることを探したいと感じた。そこで、今参加している学生団体の活動にもっとコミットして経験を積むとともに様々な本を読んだり、もちろん語学を磨いたりたくさん勉強したりしようと思った。自分のできることを一生懸命やることで、将来、自分の能力を最大限に生かすときにできることの幅を広げようと思った。それが今の私にできることだと思った。そういったことに気づかせてくれたという意味でも今回のプログラムは自分のためになるものであった。

三村 友里

お茶の水女子大学文教育学部人文科学科 1 年

1. JICA 二本松での講義を通して感じたこと・印象に残ったこと

今回の JICA 二本松での講義は、「国際協力」とは何なのか、改めて考え直すきっかけとなったように思う。私は、高校の時に参加したフィリピンの孤児院ボランティア以来、国際協力にとっても関心があり、大学に入ってから国際協力学などを学んでいたが、その中で出てくる「青年海外協力隊」というのは手の届かないような、自分にはまだ出来ないような存在だと思っていた。しかし、JICA 二本松所長の洲崎さんのお話を聞いて、それは自分が完璧を求めているからであり、現場を見ていれば自分たちにもできることは沢山あるということが分かった。例えば、感染症患者の治療はできなくても、患者を病院まで連れていく手伝い、患者の事後ケア、感染症予防啓発など是可以のできる。必要なのはその行動力だと強く感じた。何か手助けしたいと思った時に、その一歩を踏み出す勇気が大切なのだと私は思った。

私の中で、最も印象に残っているのは、派遣前訓練生の方々とのディスカッションである。私は、モザンビーク、マダガスカル、ザンビアに派遣予定の方々とお話したが、その際、協力隊になろうと思ったきっかけを伺うことができた。働いていて突然虚無感に襲われて人生を見つめ直したことがきっかけという方もいれば、入社時点で協力隊になることを考えていた方など様々であったが、皆に共通しているのは、心のどこかで引っかかっていた思いを実行に移す、強い決断力があるということだと感じた。ディスカッションを通して、人生を賭けて来ているのだということがひしひしと伝わってきた。そして一人一人が語ってくれた熱い思いに感動した。派遣されるにあたり、不安はないのか聞いたところ、それ以上にワクワクがあるから、と目を輝かせていたのが印象的だ。また、「気を抜くと死ぬのでね、協力隊は」という言葉はとも私の心に響いた。2 年間も途上国で現地の人々と暮らすには相当な覚悟が必要だと実感し、こちらまで身が引き締まる思いだった。

「青年海外協力隊」というのは自分の人生を豊かにする選択肢のひとつだといっていたが、私にとって、その選択肢を選ばない理由がないと感じた。自分もそのように将来はいつか、シニアだとしても、青年海外協力隊になる、ということを決意した。



訓練所ロビーに展示されている地球儀型の壺

2. NPO 法人コーヒータイトム訪問を通じて感じたこと・考えたこと

今回初めて NPO 法人コーヒータイトムという精神的障がい者の自立支援をしている団体

のことを知った。メンタル面での障がいというのは、突然の幻聴や妄想、うつ病になりやすいなど症状の重度は人それぞれであるが、それを理解してもらうのが大変だという。確かに、見学した喫茶店と作業所では皆が楽しそうに仕事をしている印象が強く、何か生活に支障があるようにはあまり見えなかった。メンタルケアというのは非常に難しいと思うが、周りの環境を整えてあげれば自立可能だという理念のもとで活動をされていて、実際に社会復帰をされた方の、10年間閉じこもりだったとは思えないくらい生き生きとした表情は、忘れることができない。精神障がいの方々に対する偏見は強いが、知的で純真な心の持ち主ばかりなのだとコーヒータムの理事長はおっしゃっていた。私は、このような支援がなされていることに感銘を受け、より多くの人にこの事実を知ってもらいたいと思った。自分のできる範囲で、積極的に発信していこうと考えている。

また、コーヒータムで活動している方々は震災後の原発の被害にあっていて、浪江町から避難してきたとのことだった。震災後は家族が皆ばらばらになってしまい、ちょうど軌道に乗ってきた頃に突然仕事がなくなってしまったという。6、7回は避難所の移転を強いられたり仮設住宅の住み心地が悪かったりなど、被災者としての苦労を語って下さった。時が経つにつれて、影響がほとんどなかった人ほどその震災の記憶は薄れてしまっているのは、とても悲しいことだと私は感じた。現在、復興住宅の建設は進んでいる。一刻も早く被災者の皆さんが浪江町に戻ることができることを願っている。

3. 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

国際協力にせよ、被災地支援ボランティアにせよ、どんな支援活動においても、現地のことをよく知り、本当のニーズをよく知ることが最も重要なことなのではないかと考えた。支援方法は、募金活動から草の根活動まで様々あるが、支援者側が勝手に考えた支援活動をして、実はそれがニーズにあっていないという例は少なくない。それは現地のことをあまりよく分かっていないから起こるものであり、支援者側の自己満足に過ぎないと思うのである。そういう意味では、現地の人々と一緒に暮らし、一緒に必要な支援を考えていくという青年海外協力隊の活動方法は素晴らしいものだと感じた。自分も、何かしら困っている人を助けたいという気持ちがあるのだから、途上国でも被災地でも、まずは現場に足を運んで現状を実際自分の目でみてから、自分ができることを自分なりに見つけて、最良の支援をしていこうと思う。

4. 今後の学習や研究に向けた抱負

将来的には、国際協力に携わりたいと思っているのだが、派遣前訓練生の方々とお話する中で、自分自身が今のうちにやっておくべきことがまだまだあると痛感した。特にやっておくべきだと考えるのは、自分の国のことをよく知ることだ。「国内でボランティア活動をせずに海外でボランティアなんてできない」という訓練生の言葉を聞き、自分の国での経験がまだまだ足りていないと感じた。特にコーヒータムの話を伺っていて、自分の国で起きた東日本大震災の被災者の様子や現在の復興状況がわかっていないというこ

とに気づき、海外にばかり目を向けてはいけなと強く思った。私は、しばらく日本のことをよく知り、キャリアを積んでから、国際協力に携わるのも良いのではと考えるようになった。短いプログラムだったが、本当にどれも有意義な時間であり、このような貴重な経験ができたことを大変嬉しく思う。



NPO 法人コーヒータイムの作業所入り口

宮川 優希

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科 1 年

今回の JICA 二本松青年海外協力隊訓練所と NPO 法人コーヒータイムの訪問を通して、今まで自分が知らなかったことを知り、多くの印象に残るお話を聞くことができた。中でも特に強く印象残ったことをそれぞれ述べていく。

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所での見学や多くの方々のお話を聞いて、青年海外協力隊について知らなかったことをたくさん知ることができ、将来の選択肢の一つであった青年海外協力隊が今までよりも身近なものになり、私も挑戦したいという気持ちが強くなった。講義を通して最も印象に残ったのは、「50%ゴール」という言葉であった。私は環境教育の講義を聴講したのだが、そこでは訓練生のお二人による、先日おこなったワークショップの報告を聞き私たち大学生と三好技術顧問がフィードバックをおこなった。その際三好技術顧問が、ワークショップの計画が難しかったというようなことを話していた訓練生のお二人に対しておっしゃったのが「50%ゴール」という言葉だった。これは以前スリランカに派遣されていた青年海外協力隊員の案であり、完璧にプランを立ててからではなくとにかくある程度計画をしたらやってみるということだ。任国では何かをする際、必要だけでも手に入らないものもあるかもしれない。その際「これでは完璧に準備や計画ができない」と行動を起こさなかったら、それは計画も準備も何もしていないことと同じであり時間や機会の無駄になってしまう。しかし「50%ゴール」という考えのもと、ある程度準備ができたら取り掛かるというようにすれば、その途中で新しいアイデアが浮かんたり、問題の解決方法を見つけられるかもしれない。この言葉が印象に残ったのは、私はどのような状況でも完璧を最良と考え、協力隊員も任国では完璧が求められていると考えていたからだ。発展途上国での失敗は命取りであり、完璧ではないということは失敗と同じことなのではないかと思っていた私にとって、完璧でなくてもいいという考えは新鮮であり驚きを感じた。

講義と同じくらい得るものが多くあったのが夕食時とその後のディスカッションでの訓練生との交流であった。特に、お話をしたほとんどの方々が数年の社会経験を積んでから青年海外協力隊に応募したことは、資料やホームページで読んだことはあっても、直接聞くとかかなり現実味があるものであった。働き始めて数年経つと新人ではなくある程度の経験者として扱われその道で生きていくものであり、自分の将来を決められるのは大学生のうち、就職活動を通してのみだという考えや、それに対するプレッシャーのようなものが私の中にはあった。しかし訓練所の方々は社会経験を積んだ後に新しいことにチャレンジし、また、派遣終了後どうするかはまだはっきり決めていないという方がほとんどだった。訓練生の方々の平均年齢は 27、8 歳、お話をさせていただいた方も 20 代後半や 30 代前半の方々が多かったが、大学生の私の視野で見れば 10 歳ほど歳の離れた先輩であっても、

社会的に見ればまだまだ新しいことにチャレンジできる年代なのだと、視野が広がった。20代前半で自分の一生を決める必要はない、柔軟にやりたいことをしていけばいいというのは新たな気づきであった。

また、訓練所で行われているのは“研修”ではなく“訓練”なのだという言葉の重みを感じることもできた。任国では多くの面で日本との違いが見られ、日本の当たり前は当たり前として通用しない。だからこそ自分の身は自分で守らなければならない、そのために訓練所では多くの細かなルールが設定されていると訓練生の方々がおっしゃっていた。例えば、部屋の鍵は必ずかける、パスポートを持ち歩く習慣を身につけるために名札は常に首から下げておく、外に出るときは名札の名前の面を裏側にするといったことだ。訓練所での訓練が終わると、訓練生たちは協力隊員となって任国に旅立っていく。指導側の注意を払う範囲の広さやそれらのルールをきっちりと守っている訓練生の姿に、任国への出発の直前の生活をこの訓練所で過ごしている訓練生たちの覚悟を感じた。

JICA 二本松訓練所を訪問した後に伺った NPO 法人コーヒータイムでは、自分の障がい者の方々に関する知識の少なさを痛感した。はじめ、コーヒータイムでは障がい者の自立支援をおこなっていると聞いたときに、私は勝手に身体障がい者を基本として考えていた。二本松の交流センターに到着し、コーヒータイムのパンフレットを頂いて見たときにはじめて「精神障がい者」という言葉を目にし、自分の認識が間違っていたことに気がついた。そして身体障がい者という、見ただけで障がいをもっているのだとわかる人しか障がい者として捉えてなかったのだと、自分の中にあった偏見、差別意識のようなものを痛感した。また、統合失調症がどのような症状を持つのかを知ったのもはじめてであり、障がい者支援に携わる団体の見学を行ったのも初めてであり、たくさんの新しい学びを得た。

また、コーヒータイムの代表の方が「東日本大震災によって多くの人々が家族とバラバラで暮らしているということを知っていてほしい」と強くおっしゃっていたのも印象に残った。コーヒータイムはもともと浪江町にあったが、震災の被害が大きく立ち入ることが難しくなったため浪江町役場が移った二本松に移動した。そのためコーヒータイムで働いている人はそれに合わせて引っ越しをしたり、仮設住宅に住むための引っ越しなどが重なり家族のそれぞれの状況に合わせてバラバラに住まなくてはならなくなったという。私は震災当時茨城県におり、大きな揺れを経験し数日間は生活が不便であったが、避難所で寝泊まりをしたり、震災のせいで引っ越しをしたりということはなかった。震災の被害が大きかった地域で、いかに多くの人々が今もなおもと通りの生活を送れていないのかということを知ることができ、貴重な経験となった。そして改めて東日本大震災の悲惨さを思い知った。

コーヒータイムでは学生などのボランティアも受け入れているということで、福島という遠い地にあるためコーヒータイムにまた来られるかはわからないが、同じような団体を探してボランティアに参加したいと思った。

私は昔から国際協力に携わる仕事に就きたいと思っていたと同時に、それは日本のことを後回しにして外国に目を向けているようで後ろめたさも感じていた。しかし今回、海外の発展途上国への支援をする青年海外協力隊を訓練する JICA 二本松と日本国内の障がい者支援をおこなっているコーヒータ임への訪問を通して、そのように悩む必要はないのではないのかもしれないと感じた。将来国際協力に携わるような仕事、例えば青年海外協力隊として外国のために何かをしたとしても、任期を終えて日本に帰ってきた時、日本で生かせる何かを持ち帰ってくるだろう。日本では経験できないことを経験してきたのだから、他の人々が知らないこと、考えつかないような知識や経験で日本のためになることはできる。また、国際協力に携わるからといって日本国内でのボランティアに関われないわけではなく、仕事に就く前や仕事に就いてからもいろいろな国内ボランティアに参加することはできる。また、JICA 二本松の訓練生がコーヒータ임でお手伝いをするということのように様々な形で日本でのボランティア活動に参加することはできる。国内だけの支援活動、海外のみに向けての支援活動と分けてしまうのではなく、両立させられるものとして考えればいいのではないかという発見は、今回の経験を通して得た大きなものであった。まだ専門分野が決まっておらず、将来具体的にどのような道に進めばいいのかもまだ分かっていないこの1年生の春休みに、JICA 二本松訓練所とコーヒータ임に訪問できたことは大変貴重で意味のある経験となった。

李 孝テイ

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学
心理学コース博士前期課程 1 年

1. JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

<元気で、優しい先輩たち！！>

朝 7:30 にお茶大を出発、何時間もバスに乗って、ようやく JICA 二本松の訓練所に到着しました。寒いだけで、全く雪の降らない東京と違って、福島はもう厚い雪が積もっているのに、意外と暖かいです。まだ訓練所の玄関に入っていない時に、二階の廊下から、優しい笑顔の先輩たちが手を振ってくれました。

午後は早速、「エイズ・感染症対策」の講義になります。電車が止まったせいか、先生が 30 分ほど遅れてきました。一緒に講義を受ける訓練生（ボランティアの候補者ですが、私は先輩と呼んでいます）も二人います。初対面だし、この 30 分は辛いだろうなあと思っていたら、先輩た



写真 1 JICA 二本松に到着



写真 2 広報室の人形さん

ちは普通に声をかけてくれて、あっという間に、距離感がなくなりました。

一番先輩たちの親切さに驚いたのは、夕食の時間でした。夕食前の時間は、ちょっとサボって、部屋で休んで来たら、みんなと離れ離れになってしまいました。やばい！一人ぼっちになっちゃう、と焦っている時に、先輩たちがもうここで手を洗って、隣で消毒し、ご飯を取りなさいと、色々教えてくれました。食べる時も、人見知りで、端っこに隠れようとしたら、真ん中の席に座らされ、自己紹介から、日本人の「今度一緒に〇〇に行きましょう」という世間話まで、楽しくお話ができました。

夜は先輩たちとの交流会で、見学しに来た私たちの簡単な自己紹介の後、先輩たちが自由に各グループに参加することになります。席が一番離れて、しかもメンバーも一番少なかった（二人しかいないけど）グループなので、すこし心配をしていました。だが、本当に一瞬だけで、黒いパーカーの背の高いお兄さんに見える方が目の前に現れ、すぐ他の二人の先輩も呼んできました。みんな初めてなのに、なぜかすぐに話が盛り上がり、笑い声が、大きな部屋で何回も響いています。パーカーの先輩は、絶対陽気で、おしゃべりだと思っていたら、意外とあまり自分から話さない方で、しかし、言い出したら、全く見た



写真3 各国の貨幣



写真4 みんなの目を引いた楽器

目のイメージと違うことでした。なぜボランティアに来ようと思ったのだろうと聞いたら、「うまく言えないけど、なんだか自分の心を豊かにして、幸せになれる気が・・・」。一方、シャツの先輩は、真面目に見えるが、かなりのお喋りでした。これからのボランティア活動に、何か不安に思ったことなどを聞いてみたら、「まったく！楽しみにして

いるだけです！」と、一瞬目が光っているように見えました。それを聞いて、真ん中の薄い灰色のセーターのお兄さんが、羨ましそうな顔になりました。どうやら、自動車の技術支援で、アフリカに行かれるようです。やはり、自分の性格もありますが、支援に行く場所によっても、不安や楽しみなことはまったく違うなあと、感心しました。それに、ボランティアに行かれる方々は、みんな高尚で、なにも怖くないとか、勝手に思い込んでいましたが、実際に、先輩たちもそれぞれ一人一人の人間で、自分の心配や、期待を持っていることが分かりました。

訓練所の生活は、厳しいと思うほど、規律正しいです。

決まった時間に三食や授業の他、毎朝、6:15に起きて、6:30から朝の運動をするようです。事前に頂いた連絡事項に、「上履き」をご用意してくださいと書いてありましたが、適当なオンライン辞書で引いてみたら、「スリッパ」と翻訳されて、何も思わずにそのままスリッパをカバンに入れちゃいました。着いた時に、これいつ使うだろうと一瞬疑問に思ったことがあります。結局そのままにしました。翌日の朝、体育館に行ったら、とんでもないショックでした。自分以外、みんな運動靴でした（泣く）。恥ずかしながら、素足でみんなと走った私の痛い経験から言うと、「上履き」を「スリッパ」と間違えないように、ちゃんと必要な用具を準備してきましょう。こんなことがあったにもかかわらず、朝の運動は非常に楽しかったです。始まる前に、体育館の外で、靴のことで困っている時に、「靴はいくつ？貸してあげようか」と声をかけてくれたお姉さんもいました。前日のパーカーのお兄さんが、一番外側のルートで走って、それでも、何度も私を超えて、何周も多く走ったのでしょね。「ボランティアの仕事は、熱い情熱だけではなく、現地の方とコミュニケーションを取れるように、言葉を学び、現地の



写真5 広報室の国旗とポスター

役に立てるように、自分を磨き、自分の体も健康にしていかなないとできないです。」と、昨日の感染症の講義の先生の言葉を思い出しました。

2. NPO 法人コーヒータイトム訪問を通じて感じたこと・考えたこと

＜障害者の方を、孤独の世界から、社会に戻す途中の一息休憩場＞

NPO 法人コーヒータイトムに着いた時、普通の雰囲気の良い喫茶店だと感じました。川沿いの建物で、一階はすごくいいにおいのする焼きそば屋さんと可愛い雑貨屋さん、二階は若い女の子たちが本を読んだり、お喋りをするスペースで、廊下を渡ると、今日の訪問先に入りました。美味しいクッキーといいにおいのコーヒーをいただきながら、コーヒータイトムの由来を説明していただきました。こんなに気持ちよく楽しめた喫茶店は、実は数多くの障害者の社会への復元を支援しています。障害者は、発達障害や、気分変化がものすごく激しい統合失調症などの精神障害を抱えているようです。病院や相談センターのご紹介で、カラー色巻きのボールペンやオリジナルの焼きそばのソースの包装などのお仕事をして、ご家族の負担もすこし減らし、本人もより多くの人と接することができて、仕事から成功感ももらえるようです。他に、抑うつ状態の主婦も、よくボランティアとして喫茶店の販売などをされているそうです。障害者たちがよく偏見を受けることがありますが、ここは、彼らが普通の人として仕事し、生活できるような場所を提供しています。



写真 6 二本松市民交流センター廊下

3. 参加者活動記録

グループ分けの概要

「協力活動手法」講座聴講

講座	参加者
コミュニティ開発	花岡瑞月（お茶の水女子大文教育学部 1 年） 政木優子（お茶の水女子大学文教育学部 1 年） 増田奈津実（奈良女子大学理学部 3 年） プリマサリ・ニルワナ・デウィ（奈良女子大学生生活環境学部研究生） 三浦詩歩（お茶の水女子大学文教育学部 1 年） 三村友里（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
感染症・エイズ対策	植田佳野（お茶の水女子大学文教育学部 2 年） 李孝ティ（お茶の水女子大学大学院 M1）
環境教育	岩井真恵美（宮城学院女子大学学芸学部食品栄養学科 3 年） 佐藤知香（お茶の水女子大学生生活科学部 1 年） 高嶋早紀（お茶の水女子大学文教育学部 2 年） 宮川優希（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）

派遣前の訓練生とのディスカッション

グループ	参加者
グループ 1	増田奈津実（奈良女子大学理学部 3 年） 三浦詩歩（お茶の水女子大学文教育学部 1 年） 三村友里（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
グループ 2	花岡瑞月（お茶の水女子大文教育学部 1 年） 政木優子（お茶の水女子大学文教育学部 1 年） プリマサリ・ニルワナ・デウィ（奈良女子大学生生活環境学部研究生）
グループ 3	岩井真恵美（宮城学院女子大学学芸学部食品栄養学科 3 年） 佐藤知香（お茶の水女子大学生生活科学部 1 年） 高嶋早紀（お茶の水女子大学文教育学部 2 年） 宮川優希（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）
グループ 4	植田佳野（お茶の水女子大学文教育学部 2 年） 李孝ティ（お茶の水女子大学大学院 M1）

講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」

日時：2016 年 2 月 12 日 14：00～14：50

面会者：JICA 二本松所長 洲崎毅浩氏、JICA 二本松所員 永井涼氏、中沢舞氏

内容：

（洲崎所長のお話）

28 年前、アフリカのザンビアへ派遣された。職種は「公衆衛生」。当時エイズが存在が公になりだしたころだった。

国際協力とは、多くの人々の様々な知識・能力を結び付け、蓄積し、発展させる「行動学」であるというお話だった。特に印象的だったのが、「医療のプロじゃなくても「患者を見つける」「患者を病院に連れていく」「資材調達する」「薬を買っておく」「患者のケアをする」「動けない患者の仕事の手伝いをする」「予防啓発を行う」これらの何かはできるかもしれない。学生だろうが社会人だろうができることはある。初めから完璧にやりたいから、できないと思う。動いてみる、失敗してみる…そうして早く強く効果的なやり方を見つける。Action は起こさないと始まらない。」というお話だった。「他者に喜ばれている」そう実感できる暮らしこそが生きがいのある幸せな人生。国際協力活動は自分自身のためでもあるというお話は、国際協力活動の意義をもう一度考える、いいきっかけになった。

（中沢さん、永井さんのお話）

何をもって「ボランティア」というのかと考えると、①公益性②社会性③無償性④自発性⑤自分の喜びとなる、の 5 つがあげられるとおっしゃっていた。基本的に私たちの事前アンケートをもとに話を進めてくださった。苦労したことは？という質問に対しては、「援助慣れ」という話が出てきた。JICA はほかの支援団体とは異なり、お金をあげたりモノをあげたりするわけではないので住民の人に理解してもらうのが大変というお話だった。また、お二人の青年海外協力隊に参加するきっかけを聞くことができた。中沢さんは、3.11 がきっかけで自分のやりたいことを見つめ直した結果、協力隊に参加しようと決意したとおっしゃっていた。永井さんは世界の状況を見過ごすことができずに参加しようと思ったということをお話くださった。また、ボランティアの究極の目標は手をかけなくていいようになること、ボランティアをした後で「幸せ」を考えるようになるというボランティアの根源のようなことも話してくださった。学生にできることは何だと思うか、という質問には、学ぶこと、研究すること。学生らしい、学生たることをしたほうがいいという意見をくださった。「青年海外協力隊は現地の人とともに生きる」という言葉が、青年海外協力隊の本質を語っているように感じ特に印象に残った。

文責：三浦詩歩

「協力活動手法」聴講 コミュニティ開発

日時：2016年2月12日 15:10~17:00

面会者：講師 コミュニティ開発・技術顧問 結城史隆氏

内容：

私たちは様々ある「協力活動手法」の講座のうち、「コミュニティ開発」という講座を聴講した。お茶の水女子大学生4名と奈良女子大学生2名の計6名が、派遣前の訓練生14名と一緒に、研究棟2階の講堂にて講義を受けた。講義は参加型で、質問を私たちに投げかけていく形で進んでいった。内容は主に、現地に派遣された青年海外協力隊員の失敗談を元に、自分たちがどのような心構えでこれから派遣先に向かうべきなのか、ということであった。まず初めに、手法などというマニュアルなんて無い、という結論から始まり、「コミュニティ開発」という一つのくりがけるまでの変遷を学んだ。それから、不適応隊員の事例として、生活能力、コミュニケーション能力、異文化理解力が乏しい、配属先の人間関係やシステムに適応できないなど、7項目が挙げられた。「巡回型」ではなく、より現場に近い「定着型」でそのコミュニティに自ら参加し、知ることによって上手く適応し、本当のニーズに合った活動ができる、とのことだった。青年海外協力隊の中には周囲の状況や自分の存在意義が分からなくなり、任期短縮となったり、さらには一時帰国となったりすることもあるという。そのように何が起こるか予想しづらい中で、自分の持っている能力（知識や豊かな経験など）を最大限に利用する「コーディネーション能力」の重要性について語っていた。いかにリーダーシップ、ファシリテーターシップ、サポーターシップを上手く使い分け、ちょっとしたアイデアとオリジナリティで、プラス思考で行動することが大切かについて学ぶことができた。派遣前隊員の方々もユーモア溢れる結城さんの熱い話に聞き入っていた様子であった。特に「あせらず、あわてず、あきらめず」という結城さんの言葉が印象的である。最後に私たちは、青年海外協力隊にぜひなろう、という激励の言葉を頂いて、講座は終了した。

文責：三村友里

写真：



講堂に集まる派遣前訓練生の方々

「協力活動手法」聴講 感染症・エイズ対策

日時：2016年2月12日 15:10~17:00

面会者：講師 青年海外協力隊事務局技術顧問・杏林大学医学部感染症学教授・神谷茂氏

受講生：受講する訓練生の派遣国（ガーナ、ケニア）、看護師の仕事経験を持つ方と、医療専門知識を持っていないが、病院で事務経験のある方

内容：

1. 任国事情・異文化適応講座「協力活動手法」 “変貌する感染症と国際医療協力のあり方”

細菌と人の歴史、感染症の歴史、2012年の世界の十大死因（感染症死亡者数 1790 万人、32%を占める）、低所得国における死亡原因（下気道感染症が第1位）、紀元 1000 年以降の地球温度の変化（感染症に対する予防が重要である）、ポリオワクチン接種の効果、細菌とウイルスの違い（大きさ、形、形態など）

新興感染症と最興感染症の説明

古典的感染症：健康な人にも発症し得る強い病原性を有する病原体による感染症：コレラ、ペスト、ジフテリア、結核、赤痢など

日和見感染症：易感染性宿主における弱病原性の病原体により引き起こされる感染症：肺炎、敗血症、尿路感染症など

新興感染症に対処する方法：

- 1) 正しい知識を得る
- 2) 非科学的な風聞にまどわされない
- 3) 日常的な感染防御対策：外出から帰宅したらうがい、手洗い、新鮮な外気を頻繁に取り入れる、基礎的感染免疫力を高める（睡眠、食事、ストレス、適度な運動など）
- 4) 類似症状があれば、早期に近医へ相談すること

2. 任国事情・異文化適応講座「協力活動手法」 “国際医療協力-成功例と失敗例”

訓練生の方に出した課題です。“国際医療協力-成功例と失敗例”を読んで、自分がよくできたと思ったことと、改善すべきことなどのコメントをする。

文責：李孝テイ

「協力活動手法」聴講 環境教育

日時：2016年2月12日 15:10～17:00

面会者：講師 三好直子技術顧問

訓練生[マレーシア・環境教育] 金本さん、訓練生[ケニア・環境教育] 樋口さん

内容：

訓練生お二人が1月におこなった自主講座の報告をプレゼン形式でしていただき、三好技術顧問と私たち大学生4人がその内容について質問やアドバイスをするという形式であった。

訓練生のお二人は、茶葉などの廃材を使ってふりかけを作ろうという自主講座を他の訓練生に対して開催した。3R+R（リスペクト）の意識を広める、同期隊員に環境教育のネタを持って欲しいという目的のもと、隊員は任国での生活に不安を持っている、日本文化の紹介方法を探している、訓練所での生活にストレスを感じているというマーケティングを行った。そしてお二人はイラストや歌などが得意である、キッチンや料理道具や食材は用意できるというポテンシャル分析を行い、3Rへの関心、エコクッキング、リフレッシュや楽しさという3点をコンセプトにワークショップを開催した。いきなり調理に入るのではなく、アイスブレイクを行ってから調理をし、ゴミに関するクイズをした後に環境教育と他職種との連携事例を先輩隊員の事例を使って紹介したという。計画段階で、調理場が遠くにあり雪が降る中外の通路を通らなければいけないということで、参加者の安全が第一として調理したふりかけを参加者に食べてもらうだけにしようという樋口さんと、それでも調理から参加して欲しいという金本さんの間で対立してしまうこともあったようだが、ワークショップ実施後のアンケートでは多くの参加者が満足してくれたことがわかった。しかし、参加者からの質問に答えられなかったことに対して「もっと知識が必要」というコメントや、ゴミクイズの際に盛り上がりをコントロールできなかったことに対しての厳しいコメントもあったという。加えて、広報の手段としてチラシを貼ったがそれだけではなくもっと声かけも必要だったという反省点もあがった。また、このワークショップとは別の、コンポスト作りについての報告もあった。

この報告を終えて、大学生からは参加者の任国地域や職種の傾向、任国での文化と自分の要請内容の折り合いをどのようにつけていくかという質問があり、それぞれ、コミュニティ開発とPC関連の訓練生が多くアフリカ地域とアジア地域が半々くらいであった、自分たちの価値観を押し付けないという回答をいただいた。三好技術顧問からは、まず今回の報告の前にアイスブレイクが必要だったのではないかと、机の配置が教室のようだったのが丸くするなどの工夫が必要だったのではないかと指摘があり、その後お二人が報告した反省点について「それに関してはどうできた？」と、返ってきた答えに質問を繰り返してより考えを深めていた。

文責：宮川優希

講座「協力隊体験紹介」

日時：2016年2月12日 17:15～17:55

面会者：JICA 二本松業務課副調査役中沢舞さん（キルギス・コミュニティ開発）

内容：

キルギスでコミュニティ開発隊員として活動した、現 JICA 職員中沢舞さんに、彼女が青年海外協力隊に入隊したいきさつやキルギスでの活動内容を伺った。

中沢さんが国際協力に興味を持ったきっかけは高校の地理の授業で、大学では国際文化学を専攻した。オーストラリア留学を経験した後、自動車の部品メーカーに就職してキャリアを積んだ。協力隊に志願した直接のきっかけは 2011 年の東日本大震災だった。「人生何が起こるか分からない」、「人ともっと直接関わる仕事をしたい」との思いと、かねてからあった海外への興味が合わさって入隊し、コミュニティ開発隊員(当時は村落開発隊員)として中央アジアのキルギスへ渡った。

キルギスは、北をカザフスタン、東を中国に囲まれた中央アジアの国家で、1991 年にソ連から独立し、国民の約 70%がイスラム教徒である。一年の大半が冬で、国民は家畜を現金代わりの貴重な財産としてほぼ自給自足の生活を営んでいる。中沢さん曰く、キルギス人は「お金は稼げないけど、お金を使わずに生きていける」生命力に溢れた人々である。

キルギスでの活動は、日本の一村一品活動を現地の女性手工業団体に導入していくことであった。生産団体同士で情報共有がなされていない、また、外国人観光客のニーズに合った商品を生産できていなかったりするなどの改善点を発見していき、デザインや品質を海外向けにする、商品のカタログを制作する、展覧会に出店するなどの工夫を凝らして状態改善を図った。更に、日本の無印良品と協力して動物のマスコットを日本の商品基準に合わせ、販売することが可能となった。

活動中に苦労したことは、キルギスの文化との衝突であったと中沢さんは語った。まず、キルギス人同士がお互いを信用しにくいことから起こる情報交換不足、そして、公益よりも私益を重視する価値観、仕事よりもお祝いを第一に考えること、「ブユルサ(神が望めば)」を基軸に行動するという姿勢などは活動を進める上で大きな壁となった。この面では、異文化理解が重要になった。中沢さんは「自分の事を知ってもらうには、まず自分が相手に興味を持たなければ」と、積極的に仕事外でも現地の人々と一緒に過ごす時間を増やし、互いを理解できるように努力した。

中沢さんは帰国後、JICA 二本松の職員となった。青年海外協力隊として活動に心残りもある一方、国際協力に従事することにやりがいを感じ、ボランティアからプロヘスティブアップし、一生の仕事にしようと考えてのことだった。また、二本松では中沢さんの地元である宮城県を支える活動も出来るということが進路決定の決め手だったようだ。

文責：高嶋早紀

派遣前の訓練生とのディスカッション グループ 1

日時：2016 年 2 月 12 日 19:10 ~20:10

面会者：訓練生[ザンビア・コミュニティ開発]トミーさん、[モザンビーク・コミュニティ開発]武藤さん、近藤さん、[マダガスカル・コミュニティ開発]高田さん

内容：

まず訓練生の方々に自己紹介をしてもらった。トミーさんは元 SE で、ボランティアでは PC インストラクター、武藤さんは元医薬品会社の方で、現地では農業のボランティア、高田さんは元電機メーカーの社員で、ボランティアでは農機の営業、近藤さんは元銀行員で、衛生改善のボランティアをする。

次に大学生から「なぜ仕事をやめてボランティアへ行くのか」という質問をした。トミーさんは、「彼女と別れ、結婚する前に世界へ出てみたいと思った。」武藤さんは、「学生時代に留学へ行き、楽しかった。若いうちに行動しようと思った。」高田さんは、「小さいときから青年海外協力隊に興味があった。就職の時、周りの人に相談し、企業に就職した方が良いと思い就職し、5 年以内に辞めようと思った。」近藤さんは、「小学生の頃インドネシアへ行き、途上国に興味を持った。新卒で協力隊に行くよりは社会人経験がある方が良いと思い、銀行に就職した。」とそれぞれ仰った。

次に、「就職する時はどうして決めたか」という質問をした。トミーさん、武藤さんは就職の時は協力隊のことは考えていなかったそうだ。高田さんは、国際関係に寄与できる会社を選んだ。近藤さんは、途上国に関われる会社を選んだ。

2 年後の将来についてどうしたいか何うと、トミーさんは、日本に住むより外国へ行きたいそうだ。武藤さんはまだ決めていない。高田さんは、大学院へ行き、その後国連などの国際協力の現場で生きていきたいと考えている。近藤さんは、JICA ジュニア専門員になって、いずれ結婚したいと仰った。

協力隊になる前の面接について聞くと、コミュニケーション能力があるかを見ていると思うと仰っていた。あまり自信家の人は良くなく、楽観的でストレスに強い人が良いらしい。健康診断が厳しく、健康管理は大事だと言っていた。

派遣国に行く前の今、不安はあるか尋ねると、皆あまりないと言っていた。不安よりもわくわくする気持ちの方が大きいそうだ。近藤さんは病気にならないかが心配だと言っていた。研修所は充実していて、楽しいそうだ。

文責：増田奈津実

派遣前の訓練生とのディスカッション グループ2

日時：2016年2月12日 19:10～20:10

面会者：訓練生〔ガーナ・感染症、エイズ対策〕外村さん、〔ガーナ・コミュニティ開発〕上野さん、〔タイ・電子工学〕小倉さん

内容：

どうして青年海外協力隊を志願したのかという問いに対して、それぞれ異なった回答があった。外村さんは平和構築の第一ステップとして青年海外協力隊をとらえていたから。上野さんはもともと海外に興味があり、福祉の観点から国際協力を行いたかったから。小倉さんは日本にいて情報を知るだけで行動に移さないことに意味を見出せなかったからという。外村さんと小倉さんは社会人として企業に勤めた後、上野さんは新卒で志願した。外村さんはもともと3年働いてから青年海外協力隊に志願する予定だった。一方小倉さんは就職して10年ほどで会社を辞めたあと再就職を探すと同時に志願した。3人とも青年海外協力隊に志願するまでの経緯は異なるが、開発途上国や世界平和のために自分にできることをしたい、という思いは共通している。小倉さんの「途上国では気をぬくと命を失うのだ」という言葉からは、協力隊としての強い覚悟が感じられた。上野さんが「協力隊って人間力だから」という言葉を紹介してくれたように、青年海外協力隊のような命をかけてまで他国を救おうとする職務に就くため必要な覚悟を持っているかどうか、人間力の有無によって計られているのかもしれない。2月12日は皆さんが訓練を始めて39日目ということで、訓練も終盤にさしかかっていた。

また、小倉さんは今回が3回目の青年海外協力隊派遣だそうだ。そこで、二本松での訓練が現地でのどのように役立つのか聞いた。3人に共通していたのは細かな規則が協力隊としての意識や心構えを高めるということで、忘れ物や電気の付けっ放しは厳しく注意を受けるということだ。集団生活をする上で基本的ではあるが滞りがちな規則が定められているのだ。こういった規則を守れないような者が開発途上国では生き延びられないという考えである。例えば、外出の際は自分の名前の書かれた札をひっくり返さないといけないという規則は、現地での連絡手段をきちんと保っておく重要性を意識した決まりであると教えてくれた。

最後にアドバイスを聞いた。外村さんは、「日本でボランティア経験を積んでおく」、「日本のことをよく知っておく」ことを挙げた。自国でボランティアをしたことのないのに海外でボランティアをするのは難しいということだ。小倉さんは「基本となる英語をしっかりと勉強しておく」こと、上野さんは「好きなことをやる」ことを挙げた。これは、大学生の時に海外に興味をもち、何度か留学を経験した上野さん自身の「好きなことをやっていたらここにきた」経験を反映している。3人から、それぞれの青年海外協力隊の捉え方やバックグラウンドについて聞くことができた。協力隊訓練生の皆さんの「人間力」の高さを感じることであった1時間であった。

文責：政木優子

派遣前の訓練生とのディスカッション グループ 3

日時：2016 年 2 月 12 日 19:10～20:10

面会者：訓練生[看護師]吉田さん、[障害児・者支援]大山さん、[障害児・者支援]常さん、
[マーケティング]飯塚さん

内容：

吉田さん：休職参加。前職は看護師。大学時代はカンボジアボランティアに関わっていた。

現地ではボランティアの経験も活かしつつ、5S の改善活動を行う予定。帰国後も、国際協力関係に携わりたいと考えている。

大山さん：休職参加。OL、介護の仕事を経て、看護師になった。精神科で働いていたこともあり、現地ではメンタルケアに関しての支援もしたいと考えている。帰国後も看護師として働くことを希望しており、国際協力関係にも携わっていききたいと考えている。

常さん：現職参加。JICA で働いている経験を活かしたいと思ったから。自身も視覚に障害があり、現地ではそういった障害を持った方の支援をしていきたいと考えている。

飯塚さん：休職参加。前職はマーケティングに関する仕事。いつかは国連で働きたいという思いもあり、まずは青年海外協力隊に挑戦することにした。

【帰国後に何をしていきたいと考えているか】という問いには、現地に行って 2 年間で変化していくことだと思う。今は現地で何ができるか、ニーズに合わせて活動していくということに関して集中しているとのこと。【国際協力というと他にも手段があるのに、なぜ JICA を希望したのか】という問いには、国の機関であるため、国が守ってくれる、信頼できる病院を紹介してくれたり、サポート体制がしっかりしているからとのこと。

自分が行きたい国に関しては、第 3 希望まで出すことができる。希望が通らないこともあり、面接時の内容や能力をみた上で採用側がマッチングを図るそう。

バックパッカーの経験は良いというアドバイスもあった。海外に行ってから見えてくる日本の良さがあったり、また違った見方ができるようになるとのこと。【国際協力とは何か】という議論では、後々日本のためになるのではないかと、物資等の支援だけ行う、募金活動を行うのもよし、活動には資金が必要だし、知る人がいなければ広がっていかないので、いろんなレベルの国際協力があって、それぞれができることをするのがいいのではないかと話で盛り上がった。現代、ODA の評価は若い世代で低い。この層にリーチするためには SNS を利用することも必要。リユース品の提供に関しては、質が良いため、現地の産業がつぶれてしまう可能性もあること。多くの人が、学校を建ててそれで満足してしまうが、実際は教員が足りないという状況にある。国際協力ボランティアは「自己満足で終わらない支援」が大切であるという話に全員が賛同した。

文責：岩井真恵美

派遣前の訓練生とのディスカッション グループ 4

日時：2016 年 2 月 12 日 19:10～20:00

面会者：訓練生〔フィリピン・コミュニティ開発〕小井土さん、〔ガーナ・自動車整備〕石原さん、〔タイ・コンピュータ技術〕浅谷さん

内容：

まず私たちからの質問に答えていただく形で、「青年海外協力隊を志したきっかけ」と「海外滞在中及び帰国後の展望」について伺った。小井土さんは高校・大学を経て銀行に就職したものの、その生活にあまり面白味を感じず、自分の可能性を追求するために応募したという。現地では銀行で培った金融分野の知識を生かした活動を行う予定で、帰国後は教員を目指すか、あるいは就職を考えている。石原さんは小学校の頃に協力隊の OB の講演を聴いて以来、自動車整備士として協力隊で働きたいという目標を持ち続けてきた。現地では自動車の整備と整備技術の教育を行う予定であるが、自分の技術がガーナにある古い型の車にも応用できるかどうか大きな不安があるとおっしゃっていた。帰国後は日本における整備士の人口減少問題の力になりたいという。浅谷さんはこれまでエンジニアとして働いてきた経験があり、自分のエンジニアとしての力量を試し、かつ語学を身につけて自身のステップアップにつなげたかったため協力隊を志した。帰国後はタイで起業することを考えているという。これらのことから、それぞれが全く違った経歴を持っており自分の特性を活動に反映させていこうとしていることを感じた。また、帰国後の展望は、現地での経験や現地での人脈を通していくらかでも変わる可能性があるようだ。さらに、私たちが質問していくなかで驚いたのは、「コミュニティ開発」の分野は特に働いた経験がない新卒の人や、何か専門分野に特化した知識があるわけではない人でも比較的関わりやすい分野だということだ。小井土さんは、何かの資格や社会人経験が特になくても、自分の能力を活かして行うことができる支援がある、とおっしゃっていた。もう 1 つ驚いた点は、JICA では帰国後の就職支援及び婚活支援が充実しているということであった。協力隊として活動したあとのバックアップ体制が整っていることも、青年海外協力隊の魅力のうちの 1 つであるのだなと感じた。

最後に、青年海外協力隊をどのようにとらえているかということについて伺った。それぞれの回答をまとめると、「人生は一つの道ではなくさまざまな可能性がある。海外に行くにしても、ワーキングホリデーや留学など多様な選択肢があるということを視野に入れて自分の好きなこと・得意なことを追求した上で、協力隊もその選択肢のうちの 1 つとしてとらえてほしい。協力隊の活動を通して得られる現地の人との交流経験は、人生を豊かにしてくれる。」ということであった。協力隊を目指す動機やそれまでの経歴などのバックグラウンドは人によって異なるが、それぞれの目標に向かって努力を重ねていることがディスカッションを通じてこちらにも伝わり、そのような姿勢を私達も見習っていきいたいと思った。

文責：植田佳野

NPO 法人コーヒータイト訪問

日時：2016 年 2 月 13 日 10:30～13:00

面会者：NPO 法人コーヒータイト理事長 橋本由利子氏

内容：

コーヒータイトは、障がい者の方々が毎日集まれる所があったり、喫茶店をやってお金を稼げたりするといいいだろうという考えから、2006 年に設立された。夢は街中に喫茶店をつくることである。喫茶店の運営、浪江焼そばのソース詰め、無農薬での畑作業を主な仕事としてきた。元々双葉郡浪江町を拠点にしていたが、2011 年 3 月の原発事故の影響で二本松市に移転し、今も職員や利用者は仮設住宅や見做し仮設で生活している。事故後は同年 10 月に二本松市で活動を再開し、事務所の借入や店内改装を経て、仕事の内容も変わり、利用者も二本松市の方々が増えた。今後の課題は、本格的な事業所の確保、二本松市にどう根差していくか、安定した事業運営を続けていくこと、関係者の「浪江に帰りたい」というニーズに応えることである。

お話によると、浪江にある元の拠点は原発から 13 km のところにあり、今は帰還困難区域にあって、関係者の自宅の多くも帰還準備区域や居住制限区域にある。福島県の沿岸地域には、他にも多くの福祉施設があったそうだ。また、コーヒータイトの製品の 1 つの「ぼるぼろん」というお菓子は、コーヒータイトを含め複数の団体で製造における役割や利益を分担しており、仕事をつくりだすのが大変だという。精神障がい者に対しては、犯罪を犯しうる危険な存在であるという偏見を多くの方が抱いており、そうではなくて精神障がい者は心優しい人たちなのだとすることを発信していきたいというのが理事長の考えだ。

質問の時間には、主に 2 つのことが聞かれた。まず、コーヒータイトという名前については、町でデイケアを行っていた時のコーヒースerviceがとても好評で、利用者が名づけたものだそうだ。次に、障がい者が普段困っていることについて、利用者の 1 人である志賀さんがお話ししてくださった。志賀さんは統合失調症で、コーヒータイトで働いている時は特に何も無いものの、自宅で 1 人でいる時に症状が出るという。浪江から避難した時、志賀さん一家はバラバラになってしまい、避難所を転々とした後、家族で旅館に入れたものの、一家で狭い部屋で暮らさなければならず、食事と同じものの繰り返しだった。避難して数か月後に仮設住宅に入り、自由な一人暮らしができるようになったが、それもだんだん苦しくなってしまう、半年でリタイアして現在は見做し仮設と呼ばれるアパートで暮らしている。志賀さんとしては、復興公営住宅に移りたいそうだ。

理事長のお話を聞いた後、お店と、事務所でソース詰め、ボールペンの包装をしているところを見学した。お店にはたくさんの団体の力作が所狭しと並べられ、事務所では利用者たちが一生懸命作業をしていた。

文責：佐藤知香

NPO 法人コーヒータイム作業所

日時：2016 年 2 月 13 日 11:15～12:00

内容：

障がい者の自立支援をめざす NPO 法人コーヒータイムの作業所では、利用者の方々が仕事をしているところを実際に見学しながら、普段の活動についてのお話を詳しく伺った。作業所は日曜日と月曜日が休みなので、十数名の利用者のみなさんは火～土曜日に活動している。私たちが訪問したときには利用者の方がボールペンの仕上げと浪江焼きそばのソース等の箱詰め作業を行っている最中であつたが、他にも「ぼるぼろん」というお菓子を入れる箱折り作業なども行っているという。まずボールペンに関しては他のいくつかの事業所と協力して制作しており、こちらの事業所ではさをりの糸をボールペンに巻きつけ、袋詰めするところを担当している。利用者の方が一本一本丁寧に糸を巻き、最後の仕上げのときに糸の端を丁寧に切って袋に入れている、その心のこもった作業と真剣な顔つきがとても印象的だった。また浪江焼きそばのソースの箱詰めについても、たくさんのソースなどが入った段ボールに囲まれながらてきぱきと作業を進める利用者の方のみなさんの姿がとても印象深かった。「ぼるぼろん」を入れる箱に関しては、食品を入れるものだということを考慮してこの作業所では箱折りをせず、月に 1 回程度の頻度で郡山の事業所まで赴き作業を行っているとのことだった。

そして上記のような活動に加えて、作業所では利用者の方が交代でお昼ご飯のお味噌汁やお茶を用意するなどの取り組みも行っている。作業所でそのようなことをすることによって、家庭でも料理をするようになるなど少しずつ自立への歩みを進めている利用者の方もいらっしゃるとのことだ。

上記のように、今回の訪問では、自立に向けて真剣に仕事にとりくむ利用者の方々の様子とそれを支える職員の方のみなさんの日々の取り組みをうかがい知ることができた。

文責：花岡瑞月

写真：



NPO 法人コーヒータイム作業所の外観



販売されている「つなごりのボールペン」

4. イベント終了後参加者アンケート集計結果

・写真・資料

イベント終了後参加学生アンケート集計結果

イベント終了後に、参加学生を対象に、イベント参加の経緯や満足度、関心分野についてアンケートを配布し集計を行った。

本イベントを知った経緯としては、ポスター、大学関連部署や教員などからの直接の誘い、友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報と多様な方法でイベントを知ったことがわかる。本イベントに参加した理由としては、国際協力に関心があるや参加したいが最も高く、次いで、JICA 二本松訓練所に行ってみたい、JICA ボランティアに参加したいとの声が多かった。本イベントの満足度は 12 人中 11 人が大変満足、1 名がほぼ満足と満足度の高いものであったことがわかる。開催時期・場所については、6 人が大変満足、6 人がほぼ満足であった。本イベントで役に立った内容としては、参加者全員が訓練生との交流は役に立ったと回答し、NPO 法人コーヒータムの講義・見学も 11 人が役に立ったと回答している。関心分野としては、国際協力全般が最も高く 11 人、国際協力ボランティアと東日本大震災からの復興・ボランティアが次いで 10 人と高かった。その他として、地域おこしや環境保全が挙げられた。

記述部分としては、「青年海外協力隊は多様なバックグラウンドを一人一人が支援活動にいかしていることがわかりよかった」、「自分の将来像が今回のプログラムを通して見えてきたように思う」など、具体的な国際協力ボランティアに関する知識に限らず、訓練生の国際協力ボランティアに対する姿勢などから多くを学ぶことができたことが伺える。また、「海外での活動ばかりではなく、自分の住んでいる地域や被災地をはじめとする日本国内でもアクションを起こしていきたいと考えるようになった」という声も寄せられた。

本イベントをどのように知りましたか（複数回答可）	計
学内メーリングリスト	1
ポスター等の掲示	7
大学の HP	1
大学関連部署・センター・担当教員などからの直接の誘い	6
友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報	4
その他	0

本イベントに参加した理由は何ですか（複数回答可）	計
国際協力に関心があるから。	12
国際協力に参加したいから。	11
JICA ボランティアに参加したいから。	7
東日本大震災関連 NGO のお話を聞きたいから。	6

JICA 二本松訓練所に行ってみたいから。	8
福島県に行ってみたいから。	1
その他	1

本イベントの参加満足度は	計
大変満足	11
ほぼ満足	1
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントの開催場所・時期について教えてください	計
大変満足	6
ほぼ満足	6
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

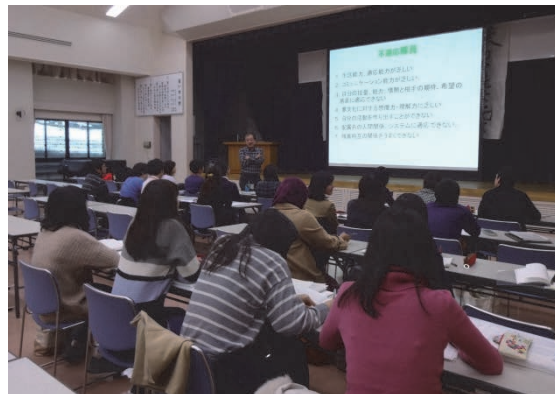
本イベントのどの部分が役に立ちましたか	計
JICA 講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」	8
JICA 講座「協力活動手法」	9
派遣前の訓練生との交流	12
グループ・ミーティング	5
NPO コーヒータイム講演・見学	11
その他	0

関心分野	計
国際協力全般	11
国際ボランティア	10
東日本大震災からの復興・ボランティア	10
開発途上国に関わること	2
その他	1

写真



JICA 二本松所長 洲崎毅浩氏



結城史隆技術顧問による講座
「コミュニティ開発」を聴講



三好直子技術顧問による講座
「環境教育」を聴講



神谷茂技術顧問による講座
「感染症・エイズ対策」を聴講



訓練生との交流



訓練生とのディスカッション



朝の集い



JICA 二本松訓練所にて



講義「NPO 法人コーヒータイムの活動」
理事長 橋本由利子氏



コーヒータイムにて

お茶の水女子大
グローバル協力センター 様

2016, 2, 13

NPO 法人コーヒータイトム概要



二本松駅前 智恵子像



現在のコーヒータイトム

*設立 平成18年4月1日

(毎日集まれる所があると良いね。喫茶店を皆でやってお金が稼げると良いね)
が始まり。夢は「街中に喫茶店を」

*場所 福島県双葉郡浪江町大堀地区(大堀相馬焼の里隣)

*経過 保健所(地域参加型グループワーク)→浪江町ディケア(やってみ会)→コーヒータイトム(小規模作業所コーヒータイトム)→就労継続支援B事業所

*主な仕事 喫茶店2店舗の運営・浪江焼きそばのソース詰め・

無農薬での畑作業(じゃがいも・さつまいも・玉ねぎなど)

*2011年3月11日東日本大震災と東京電力福島第一原発災害により利用者15名、職員5名全員避難 今も仮設や見做し仮設(アパート)で生活中

*2011年10月避難先の二本松市で再開 (利用者7名・職員4名)

*2013年1月金色事務所借入・焼きそばソース詰め作業やボールペンの糸巻作業

*2014年5月店内改装終了・20スペースを箱ショップとして貸し出す

*2015年11月二本松市市民交流センター内で喫茶店を運営、金色事務所でボールペンの糸巻作業や委託作業・アパート清掃の施設外就労を実施、利用者は浪江町出身4名・二本松市他14名

*これからの課題・・・本格的な事業所の確保と二本松市にどう根差していくか。安定した事業運営を続けて行には。「浪江の帰りたい」とのニーズに応えるには。

ようこそ、 コーヒータイムへ

ここに居がいをもった人たちは、なかなか親元から自立できなかったり、社会復帰ができなかったり、コミュニケーションが苦手だったりします。周りの環境を整えてあげれば、自立可能な人が多いと思います。そんな人たちが、家に閉じこもったりすることなく気軽に参加できる憩いの場であったり、作業ができたりする場が「コーヒータイム」です。

おいしいコーヒー、ラスクやケーキに当店自慢のソフトクリームをご用意いたしておりますので、皆さまお気軽にお出かけください。

小箱ショップでは、市民の皆様の手づくりの製品を多数販売しています。市民のいいこの場として親しまれています。



ほっと一息 コーヒータイム



1F カラエ・ギャラリー



ショップ入口



3F
カフェ・ラウンジ



金色事務所

事務所

台所

販取り

つながりボールペン

自主製品作業や委託作業



「就労継続支援B型事業所」とは

障がい者自立支援法に基づく就労継続支援のための施設で、一般企業への就職が困難な方に就労機会を提供するとともに、生産活動を通じて、その知識と能力の向上に必要な訓練や、社会生活に必要な知識を身につけるための支援をする事業所のことです。

小箱 ショップ

小箱にはものこもった手作り作品がキラキラと並びます。温かい木のぬくもりに癒されながらゆっくりと小箱を眺めていると、それだけで時間がたつのを忘れてしまえそうです。



カフェ（喫茶）

サイフォンで入れるコーヒー大塚相馬焼のコーヒーカップも選べ、おいしくいただけます。1Fはギャラリーを併設展示、3Fは展望ラウンジです。



スイーツ販売

ラスクやケーキ、当店自慢のソフトクリームのテイクアウトができます。コーヒーの出張サービスも承ります。



ギャラリーコーナー



定期イベント実施いたします

手芸教室や季節ごとのイベント等、定期的に実施いたしております。皆さまのご参加、心よりお待ちしております。

NPO法人 コーヒータイム

福島県二本松市本町二丁目3-1
(二本松市市民交流センター内 1F・3F)

TEL 0243 (24) 8081

FAX 0243 (24) 8082

1F カフェ・ギャラリー

3F カフェ・ラウンジ

金色事務所

福島県二本松市金色 402-1

TEL 0243 (24) 1446

FAX 0243 (24) 1447

営業時間：10:00～15:00

お休みの日：毎週日曜、月曜日

および祝祭日



就労継続支援B型事業所

ほっと一息 コーヒータイム



理念

コーヒータイムは
社会の入口です

モットー

いそがず
あせらず
あきらめず

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」実施報告書

2016 年 3 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel/Fax: 03-5978-5546

Email: info-cwed@cc.ocha.ac.jp